姿の違う織斑一夏

〇ンチタイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姿の違う織斑一夏

【Ｎコード】
Ｎ５６４５Ｖ

【作者名】
○ンチタイム

【あらすじ】
気が付いたら転生憑依。織斑一夏とはまた違ったそれを歩んだ織斑一夏は、まったくの別人となって成長した。
そんな織斑一夏の繰り広げる物語。
ニヤニヤしながら見ていただければ幸いです。

第1話

「ふんっ！ふんっ！ふんっ！ふんっ！……」

朝から鍛錬なんて我ながらよくやるものである。
しかし体を鍛えていないと落ちつかないのだよ。
なにせこれから女子しかいない学校に通おうと言うのだから。

「あー……シャワー浴びて行くか」

俺の名前は織斑一夏。
そう、あのＩＳの主人公である、織斑一夏だ。
１５年前に憑依転生して以来、ずっとこの名前で生きて来た。
しかし原作とは程遠い容姿である。と言っても顔のパーツは変わらないが。
生活環境や性格、食事方法など様々な物が異なり、この歳になるころには身長が１８０近くなり、体重も７０周辺のガタイの良い体つきだ。
そうやっていつも体を鍛えているせいか、目つきも少しだけ鋭い。

「まあ原作のことなんてこれっぽっちも憶えてないけどな」

幼馴染の箒と鈴、姉ちゃん等々は既に会っているので知っている。
しかし名前すら出て来ない人も多くいる。
こんなことを考えていても仕方がないので、俺は最小限の荷物だけを持ってＩＳ学園へと向かった。

軽い拷問である。
真ん中の一番前という、どうしてこうも目立つ席になったのか。
背中に刺さる視線が恐ろしく鋭い。そしてキラキラしているのがわかる。

「次、織斑一夏くん」

「はい」

なんてことない、ただの自己紹介だ。
周りに女の子しかいないからなんだというのだ。
俺は俺。関係ない。

「織斑一夏です。これからよろしくお願いします」

ああ、ミスったな。
もっと何か言えば良かったのだが、そこで言葉を切ってしまった。
「仲良くなりたいです」とでもつけ加えておけば無難だったのだが、こう一度区切りをおいてしまうと何か面白いことを言わないといけない気がする。
しかも「なにかしてくれるよね？」という期待の眼差しもセットでついて来る。
女子特有の甘い空気でお腹いっぱいなんだけどなぁ。
面白いこと……ねぇ。

「お……」

「お？」

またミスったよ。
なんだよ「お」って。「お」から始まる面白い言葉って……

パアンッ！

「お前は挨拶もまともに出来んのか」

２つの意味で頭に衝撃が走ったが、取り敢えず俺は救われたらしい。

「お、お姉ちゃん！」

「気持ち悪い呼び方をするな。ここでは織斑先生と呼べ」

気持ち悪いって……普段は「お」がないだけだからそんなに変わらないだろ。
しかも先生？
たまにしか家に帰って来ないと思ってたらこんなところで先生やってたのかよ。
家族なんだから教えてくれても良いだろうに。
そう言えば昔から俺にＩＳ関係の話をすること嫌ってたよなぁ、なんでだろう。

「え？織斑くんってあの千冬様の弟？」

「それじゃあ世界で唯一ＩＳを使える男って言うのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

ごめんけどそれは無理だ。
姉ちゃんは俺にとってただ1人の家族だからな。
冗談でも変わってやるなんて言えないよ。

「ちょっといいか？」

ＨＲも一時間目の授業も終わりぐったりしていると、ツインテールの少女が俺の机の前にやってきた。
予習はしてたんだけどさ、理論を理解しようとするのはなかなかに難しいんだよ。

「ああ、なんだ？」

幼馴染の篠ノ之箒。それが目の前の女子の名前。
昔から凛々しくて綺麗な女の子だった。

「……」

ここでは話しづらいのか、無言の眼差しで訴えてくる。
まあ女子が「話しかけたいけど恥ずかしい！」みたいな目で牽制をしあっていたから仕方ないか。

「廊下で話すか？」

「うむ、そうだな」

なんで喋り方がこんなにしっかりしてるんだろうな。
神社の娘だからか？いや、それはもう片方の娘という反例があるからその命題は偽か。

「……」

廊下に出たはいいんだが箒は一向に口を開こうとしない。
自分から誘って来たくせに。

「あー……髪型。まだ変わって無かったんだな。見て直ぐに気付いたよ。ああ、箒だなって」

「そ、そうか……
（髪型を変えなかった甲斐があるというものだな、うん）」

この調子で機嫌を上げてくか。

「それと剣道、強くなったな。驚いぜ、全国大会優勝は」

「な、なんで知っているのだ！？」

「そりゃあ俺も剣道やってたからな。中継見てたんだよ」

中学の頃はバイトして姉ちゃんを楽にさせてやりたいと思ってたから部活には入ってなかったけど、体は鍛えてたし、剣道も興味はあるからな。
他にも花園・甲子園・春高は毎年見てるぞ。

「……そうか……」

なんか急に元気なくしたな。
どうしたものか。

「しかしあれだな。見てて思ったが、相手のことを強く叩き過ぎだ。痛かったろうに。真剣でも相手を切るのに力は必要ない。真っ直ぐ振り落として、腕を絞るだけで十分だろ。緊張してたのか？」

剣道って痛いイメージあるけど、それは下手なヤツの話だからな。上手いヤツは相手に痛みを感じさせずに一本とれる。

「違う。緊張などしていなかった。ただ、ただ私は――」

キーンコーンカーンコーン

「チャイムだ。話はまたあとで聞くから戻ろうぜ」

なにか言いたげだったな。
俺にはわからないけど、なにかあったのだろう。
そう言えばあの時は画面越しにも箒の威圧は掛かってきてたかもしれない。
なんていうか、剣道の気迫ではなく怒りの様な……。
まあ考えたところで真相は本人にしかわからないんだ。
あとでゆっくり聞いてやるか。

第2話

「ちょっとよろしくて？」

二時間目の授業が終わり、またぐったりしているとまた誰かが話し掛けて来た。
ブロンドのふわりとした髪が美しく、腰に手を当てて胸を張っている様がよく似合っている。

「えっと……セシリア・オルコットさんだっけ？」

「ええ。イギリス国家代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

自己紹介の時も同じようなこと言ってたっけ。
なんか関わるのがもの凄くめんどくさそうな感じなんだが……。

「まあ！なんですのその顔は！わたくしに話しかけられただけでも栄光だというのに、もっと相応しい表情があるでしょう」

そこまで顔に出したつもりはないが、露骨に嫌な表情でも見せたのか。
話しかけられただけで栄光というのは、さぞかし高貴な出身なんだろうな。
俺には手に負えない。

「ああ、ごめん。俺はあんたがどういう人か全く知らないし。こういうときはどういう表情をすればいいんだ？」

「このわたくしのことを知らない？入試首席で通過して、唯一教官を倒したこのわたくしを？」

入試ってなんだよ。

あのＩＳに乗ってたら勝手に突っ込んで来て勝手に壁にぶつかって勝手に気絶するあれか？

あれが入試ならちゃんちゃらおかしいぜ。

みんな勝てて当り前だろ。

「そんなことで自慢できるとか、めでたい頭してるな」

「な、な、なんですって……！！」

「だってそうだろ？入試の教官？あんなの勝って当たり前だろ。そんなこと自慢されて俺はどうすればいいんだ？手を叩いて極東の猿（イエローモンキー）らしく笑えってか？ハッハッハ！」

言った通り、俺は手を叩いて嘲笑してやった。

最初に喧嘩を吹っ掛けて来たのは向こうだ。俺は悪くない。

「あ、あなたねぇ！このわた――」

キーンコーンカーンコーン

この学校のチャイムは狙った様に人の発言を遮るな。

今回はそのお陰で助かったが。

「お、憶えてらっしゃい！」

はいはい、もう忘れたから黙って席につけよ。

俺だってあんな恥ずかしいことしたことを今では後悔してるんだ。
声が大きかったからクラスのみんながこっちを見てるんだよ、くすくすしながら。
これじゃあホントに客寄せパンダじゃねぇか。
ここは動物園じゃないんだからそういうことをやらせないでくれ。

「ああ、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

三時限目の前に急に姉ちゃんが喋り出した。
一気にそんなことを言われてもわからないが、とにかくならない方がいいというのはわかった。
それだけわかれば問題ない。
俺は絶対クラス代表なんてならないぞ！

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

予想はしていたけど、いざそう言われると気が重くなる。

「私もそれが良いと思います！」

なんでも便乗すればいいってもんじゃねェぞ？
こういうのはちゃんと自分の意見を言うべきなんだ。
議論って言うのはそういうものだろ？

「では候補者は織斑一夏……他にはないか？自推他推は問わないぞ」

「えっと――」

「さて、他にはいないのか？いないのならこのまま織斑がクラス代表だぞ」

人の話訊こうか。
手を挙げてるのに無視するって教師としても姉としてもどうなの。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

そうだそうだ。
俺がめんどくさがって嘲笑したのにセシリアは俺を庇ってくれるらしい。
なんて良いヤツだ。さっきの無礼を許したまえよ。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……ん？それには少し賛同できないかな。

「なんで俺が代表だと恥晒しなんだよ？」

「決まっていますわ。男というだけで注目を浴びて、サーカスでもやるつもりですの？」

サーカスねェ。
このクラスはさっき動物園みたいになっちまったからな。
強ち間違いじゃねェよ。

「サーカスなんてやる気はねェよ。そんなにやりたきゃその髪の毛を鬣にでもして火の輪くぐってろ」

「なんですって！？わたくしを馬鹿にしますの！？男の分際で」

はぁ、イヤな世の中になっちまったもんだ。
ＩＳが操縦できるから女の方が偉い。だから権力を振りかざすなんて違うだろ。
そんなのは力でも強さでも何でもない、ただの暴力じゃねェか。

「男で悪かったな。そんなに自分が目立たなきゃイヤなのかよ。世界は自分を中心に回ってるとでも思ってるのか？」

実際回ってるんだけどな。
それぞれの人を中心に、自分の世界が広がっているわけだし。

「ぐっ……そ、そこまで言うのなら決闘ですわ！」

「ああ、いいぜ。不毛な議論を交わすよりわかりやすい」

男には引き下がれない戦いってのがあるもんだ。
これだけ啖呵切って負けるわけにもいかないしな。

「それでは期日は来週の月曜。場所は第３アリーナ。それで互いに異論はないな？」

「ありませんわ！」

「ああ、ねえよ」

パアンッ！

「敬語を使えと言っただろう、敬語を」

「はい」

かくして俺とセシリアの決闘が決まった。

相手が女？

そんなことは関係ない。

互いの意志がぶつかって引けない状況なのに、そんなこと言えるヤツは頭がおかしい。

「（勝つさ、絶対）」

第3話

俺は今日から寮に入るらしい。
一週間は自宅通いと聞いていたのだが、急遽部屋割を変えてくれたらしい。
相部屋ということだが、それでも通学は面倒なのでありがたいことだ。
これで通学の時間も鍛錬に当てられるし万々歳だな。
荷物は姉ちゃんが必要最低限のものだけ持って来てくれたらしい。

「ここ、だよな」

周囲の女子の視線が辛い。
なにせ女子寮だ。
「うらやましーなー」
などという声が聞こえてくるが、無視だ無視！
それになにが羨ましいんだ？
俺と一緒に暮さなきゃいけない女子か？そりゃ可哀相の間違いだろ。

ガチャッ

あっ、鍵が開いてるってことはもうここの住人は部屋に帰っているのか。
そう思ったのだが、部屋を見渡す限りその気配はない。

ジャー……

ジャー？何の音だ？

このドアの向こうからするみたいだけど……もしかしてシャワーか？
それはまずいだろう。

「誰かいるのか？」

ドアの向こうの、さらに向こうのドアが開いた音がして、中から声がする。

「あ、ああ、今日からこの部屋で同居することになった織斑一夏だ。よろしく」

ドアが開かない様に体で抑えながら中のヤツに声を掛ける。
これが開いたら大問題だ。
この歳でセクハラで捕まるとか人生終わってる。

「い、一夏！？」

「その声……箒か？」

「な、なんで一夏がここにいるのだ！」

「だからさっき言ったろ？相部屋になったって。でもよかったぜ。箒と同じ部屋で。知らない女子と一緒じゃおちおち眠れやしない」

それは箒と一緒でも同じだが、今はそう言うことにしておこう。
実際箒と同じ部屋で寝るって考えると寝れそうにないもんな。
あいつ妙に色々な部分が発達してるから。

「私と一緒なら寝れるのか？」

「ああ。お前を抱き枕にして寝ても良いくらいに安眠できそうだ」
「だ、だだ、抱き枕！？
（そ、それはそういうことか！？そういうことなのかぁ！？）」
いや、今のは言い過ぎた。
俺は何もしないよ、という旨を伝えたかったんだが、上手く伝わってないのか。
「ああ、そうだ。そう言えばあの時言い掛けた事ってなんだ？」
「あの時？」
「二時間目の前だよ。なにか言い掛けてただろ？」
「……全国大会の話か？」
さっきまで少し浮かれた様な口調で話してたのに、急におとなしくなりやがった。
そんなに話したくない事なら話さなくても良いんだけど。
でもさっき話し掛けたってことは話して楽になりたいって言う可能性もあるよな。
ここは黙って聞いてやるか。
「ああ。聞かせてくれ、何があったか。なんであんなことをしたのか」
「……ふっ、テレビ越しでもわかるのか、お前は。わたしのことが」
「怒ってたくらいはな。なんでそうかまではわからないけど」

「やはり一夏はすごいな。いつまで経っても敵わない、私の憧れだ。そんな一夏との繋がりは剣道だけだと思ってきた。それなのに、私は道を踏み外した。怒りにまかせて剣をふるい、相手を傷付けてしまった。それが、それが私は許せない――――！」

……そうか、そうか。

なんで怒ってたかはわからないけど、何かがあったんだろうな。こいつにとって大事な何かが。

「もう、もうそんなことはないんだろ？」

「え――？」

「もう怒りにまかせて人を傷付けるなんてしないんだろ？それならそれでいいじゃねぇか」

「でも、私は剣道を自分の手で汚したのだぞ！？」

「そうかもしれないな。それに人は過去には戻れない。どれだけ悔やんでも戻れないんだ。でも、未来は変えられるだろう。お前は自分が間違っている事に気がついた。それなら変われる。お前一人で変われないなら、俺がお前を変えてやる。それでいいじゃねぇか」

過去の過ちは人を成長させる。

失敗して、転んで、傷付いて、立ち上がって……。

人間って言うのはそうやって強くなっていくもんなんだよ。体も心も。

「そうだ。お前もう服着たか？」

「なぜそんなことを聞くのだ？確かに浴衣は来たが――」

「それ脱げ」

「なっ――！？な、何を言っているのだ！そんな、私はまだ、心の準備というものが、だな……」

「良い、教えてやるよ」

「お、おお、教える！？い、一夏は経験があるのか！？」

「当り前だろ？お前もあるじゃねェか。なに言ってんだ？もしかしていきなり記憶喪失か？」

「（わ、私も経験があるだと！？い、いつだ！？相手は！相手は誰だ！？一夏の相手も私の相手も誰なのだ！？……もしや一夏？い、一夏が私の知らない間にあ、あんなことをしたというのか！？）」

「なに黙ってんだ？竹刀持って先に外で待ってるから、お前も早く道着来て来いよ」

「……ふふっ、ふふふふふふっ……」

俺と久し振りに稽古出来るのがそんなに嬉しいのか？
そんなに喜んでもらえるなら幸いだ。
少し素ぶりでもして待ってるか。
ランランルー！

「……ど、どうしたんだ？」

圧倒的気迫。
剣道着を纏った箒は何故か後ろに般若を抱えてやってきた。
もしや……スタンド使いか！？
武道にスタンド持ち込むなんて反則だぞ！？俺は持ってないのに！
卑怯だぜ、そりゃあ。

「さあ、始めるか」

「防具は……？」

「いらん！」

お前にはスタンドという防具があっても俺にはないんだ！
対等じゃないだろ、それは。
袈裟斬りで俺の頭をかち割ろうとするその竹刀を俺もしないで防ぎ、
鍔迫り合いに持ち込む。

「お前なんでそんなに怒ってんだよ！」

「うるさい！黙って斬られろ！」

「そんな理不尽なことがあってたまるか！せめて理由くらい話せ！」

「……弄んだ」

「なにを？」

「乙女の……乙女の純情だぁあああ！」

意味がわからん！

俺がいつそんなことをした。

俺は普通に一緒に剣道の稽古をしようと誘っただけじゃないか！

乙女の純情を弄べるほど男の純情は汚れちゃいないのに。

取り敢えず引き面を打って来る箒の竹刀を受け、今度は俺から飛び込んで面を打った。

そしてまたも鍔迫り合い。

「お前……強くなったな」

「べ、べつにそんなことはない！まだまだ一夏の方が強いではないか！そう言えばどうして大会に出て来なかったのだ？一夏なら優勝できただろう」

「買いかぶり過ぎ。俺は強くねェよ。それに剣道部にも入ってなかった」

「……それなのにまだ私はお前を追いぬけないのか？」

「ばーか。バイトが忙しくて部活をやってなかっただけで、家じゃちゃんと鍛えてたよ。お前に笑われたくないからな」

「そ、そうか。それは当然だな、うん」

「それにほら、お前を守るのも俺の役目だからな。お前より弱かったら話にならないだろ」

「そうだな。か弱い女子を守るのも男子の務めだ」

か弱い？箒が？
それは面白い冗談だ。屈強の間違いだろう。
とは言わない。言えばどうなるかわかっているから。
それにか弱い「女子」だから箒限定でも無いしな。
まあ今の時代女の方が強いわけだけど、それでも守りたいと思うのが男だろう。

そんなこんなで稽古をしながら談笑して、俺たちは部屋へと戻り、これからのことを色々と決めた。

第４話

「おーい箒」

朝起きて学校へ行く準備をしたのはいいが、箒がなかなか起きてくれない。
そんなに昨日の稽古が疲れたのか？
俺はなんともないから箒もてっきりなんともないと思ったんだけどなぁ。

「おい、起きろ。遅れるぞ」

「……」

ゆっさゆっさと揺すって見るが起きる気配は一向にない。

「起きないとキスするぞ？」

「……」

ああ、こいつやっぱり起きてるな。
怪しいと思ってたんだ。
いくら疲れていようが規則正しい生活を送るこいつが寝坊するなんておかしいんだよ。
そして今の発言で確信した。
顔赤くしたし、少しニヤけやがった。
これでまだ寝ていると主張するならその幻想をぶち殺す！

「じゃあ俺先行ってるからな」

「ま、待て！起きている！すぐに着替えるから待っていろ！」

やっぱりな。
こいつはなにがやりたかったんだ。
もしかしてホントにキスするとでも思ったのか？
そう簡単に俺のファーストキスは捧げんよ（キリッ

「い、行くぞ！」

「おお、速いな。まあ行くか」

こいつは全国早着替え選手権に出したら間違いなく入賞できるな。
そんな名誉は要らないと思うけど、気にするな。
欲しいヤツだっているんだよ。着替えに命を掛けてるヤツも。

「お前今日みたいに寝たふりするのやめろよ？」

「わ、私は寝た振りなどしていないぞ？あれは寝ていただけだ」

「あれ、ねぇ」

「寝ていただけだと言っているだろう！」

「わかったわかった！そう照れるな」

「てれ――！！照れてなどいない！」

「照れてるんじゃないのか？キスって言った瞬間顔真っ赤だったじ

ゃねぇか」

「う、うるさい！気のせいだ！」

まあそういうことにしておいてやるよ。

周りに女子がいっぱいいる状況で「キス」なんてデカイ声で言われたら困るしな。

「「あっ……」」

寮食堂に着くとセシリアと目があった。

別にこれといって意識はしてなかったが、ついつい声が出てしまった。

「おはよう、セシリア」

あれはあれ、これはこれ。

クラス代表決定戦のことでいがみ合っても、わざわざ普通の学園生活でいがみ合う気は毛頭ない。

クラスメイトなのに雰囲気悪いとかクラスのみんなに迷惑だからな。

「ご、ごきげんよう。挨拶をされたからと言って今更手加減などしませんわよ？」

なんでこいつはその話にこじつけたがるかね。

「大丈夫、必要ない。あと昨日のことは忘れてくれ。ついつい喧嘩を買っちまったがこういうところで雰囲気を悪くする気はないんだ。代表決定戦は俺とセシリアの問題だ。他のみんなに迷惑掛ける訳にもいかないしな。そういうことだから」

向こうが喧嘩を売ってきたからと言って、それを買った俺も悪いわけで、セシリアのことを貶したのは悪いと思ってるんだよ、俺は。

「おばちゃん、和食定食２つ。箸もそれでいいだろ？」

「あ、ああ。しかしどういうことだ？」

「なにがだよ。勝手に和食定食頼んだことか？」

「違う。あいつに何故謝ったんだ。悪いのはあっちだろう」

「どっちも悪くねェよ。意見が違うのは当り前だ。それを正式な場を設けて決めるってんだから、そこ以外でセシリアを嫌う理由はない」

少しめんどくさいけど、自分の意志を強く持ってるから強いヤツなんだとは思う。

決闘は実力もそうだが、信念を折るためにやるものだから、厄介な相手だな。

「昔から変わらないな」

「いや、普通そうだろ？剣道の相手も試合中は敵でも終わったら普通に話すだろ」

「まだ勝負はおわってないではないか」

「そうだけどさ……そう人の揚足を取るな」

「そんなつもりで――」

「はいっ、和食定食２つおまちっ！」

「ありがとう、おばちゃん。今日もうまそうだ」

「美味そうなんじゃないよ。美味いんだ」

「そうでしたね。で、箒はなんて言おうとしたんだ？」

「私はそんなつもりで言ったわけではないと言ったのだ。勝負が終わるまでは敵だろう」

これじゃあ不毛な議論だな。
敵には変わりないけど敵じゃない。
うーん、やっぱ人間同士完璧にわかり合うなんて出来ないな。それが幼馴染でも。

「ま、その話はこれで終わりにして飯食おうぜ」

鮭の塩焼きにほうれん草のおひたし、しじみの味噌汁に白米、それに冷奴。
朝からこんな豪華な食事が出来るとか最高だろ、ここの食堂。

「これ美味いな」

全部美味い、全部美味いよ！
なんだここ？料亭ですか？高級和食レストランですか？

「そうだな。まあ……あれだ。私はもっと美味しくなる食べ方を知

っているがな、うん」

「マジか？すげぇな、お前。どうやんの？」

これを更に美味しく食べられるとか箒どんな食べ方してんだよ。

というより食べ方で味は変わるもんなのか？

まあ気持ちの問題としておこう。

「く、口を開けてみろ……」

「こうか？」

「はいあーん……」

「篠ノ之さんずるーい！」

「あたしもあーんしたい！」

「やってほしい！」

周囲の視線が気になるが、箒が顔を紅くしてまでやってくれてるんだからやらない訳にもいかないだろ。

このまま断ったら雰囲気も悪くなりそうだし。

「あーん……もぐもぐ……。うん、美味いよ、お前も食うか？」

「そうか？それなら……遠慮しよう」

「遠慮するなって。ほら、恥ずかしいのか？」

「そうではない！そうではないが……」

チラっ

ああ、そういうことか。

「流石にあーんしてもらわないよね？」「してもらうなら私たち全員もしてもらうよ？」みたいな視線が送られて来ている。

そりゃあ出来ないわ。

「じゃあまた今度な」

「ぜ、ぜったいだぞ！？」

「おう、あーんくらいいくらでもやってやる」

「い、イく――」

「いくらでも！？」

「それじゃあ私にもやってくれる！？」

「わたしもわたしも！」

「ああ……また今度な」

わあ！っと歓喜が上がった。

そんなにあーんというのはされて嬉しいものだろうか。

魚なんかは骨があっても吐き出せないから地獄だと思うぞ。

それと箒。割りこまれたからだけどその発言はエロい。

「……どうした？」

「なんでもない！」

誰だよ、箒を怒らせたのは。

「お前だ！」

うおっ、俺か。

心が読まれたからビックリしたぜ。

やっぱりみんなにあーんする約束してるから怒ってるのか。

「……そうだ。お前肩凝ってるだろ？」

「どうしてそんなことがわかるのだ？」

胸が大きいヤツは肩が凝るって相場が決まってるからな。

まあそうじゃなくて、昨日稽古した時に昔より肩の可動域が狭くなった気がしたからなんだけど。

「見てればわかるって」

「それで、だからどうしたというのだ？」

「揉んでやるよ」

「も、揉む！？」

こいつ変なこと考えてるだろ。

肩って揉む以外になんて言えばいいんだよ。叩くか？

「マッサージだよ。俺得意だから、そういうの」
体鍛えてたらそう言う本にも目を通すようになって出来るようになっちまった。
それ以来姉ちゃんのマッサージ師としてこき使われているぞ。
でもやるのは飽く迄ストレッチ的なマッサージ。
整体や本格的なマッサージは資格がないヤツがやると怪我をするからな。みんなも注意しろよ。

「そ、そうか。では今日の夜頼む……
（揉むとはそういうことか……。て、てっきり、む、む……やっぱり何でもない！）」

「りょーかい」

1人で顔赤くさせて頭振るって、大丈夫かこいつは。

「織斑、お前のＩＳだが準備まで時間が掛かる」

唐突に姉ちゃんから告げられた。

「いや、それって……」

あれだけの啖呵を切ってまさかの不戦敗？
そんなのだけは絶対にない。

本気で戦って負けるなら未だしも戦わずして負けるとか哀し過ぎるだろ。
いや、哀しいとかじゃなくてやりきれない。
「予備機が無い。だから少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「……はあ」
そういうことなら問題ない。
取り敢えず戦えるということは保障されたんだろ？
いや、例えＩＳが無くても俺は生身で戦うさ（キリッ
「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」
だから俺は生身でも以下略。
「まあ？一応勝負は見えていますけど？流石にフェアではありませんものね」
「なにが？」
「あら、ご存じないのね。いいですわ、庶民のあなたに教えて差し上げましょう。このわたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生……つまり現時点で専用機を持っていますの」
「ほう、それはすごいな。じゃあ今度から同じ専用機持ちってわけだ。その時はよろしく頼むよ、セシリア」
「……え、ええ、もちろんですわ」

「ああ、あとどっちが勝っても俺にＩＳのこと教えてくれないか？訓練機の借り出しとかメンテとか時間が掛かるんだろ？それならお前に頼んだ方が早いし、なにより代表候補生って言うくらいだから強いんだろ？色々教えてくれ、頼んだ」

「ま、まあそこまで仰るのなら仕方ありませんわね……。なにせ専用機持ちですから！

（どうしてわたくしの戦意を削ぐようなことばかり言ってくるのかしら……。わかりましたわ！これは作戦。術中にはまるわけにはいきませんわ……！）」

なんだ、普通に話せば普通に良いヤツじゃないか。

まあなんにせよ手は抜かないけどな。

第5話（前書き）

今回は初めての戦闘ということで、あえて剣道の基本に忠実にさせましたが、以降もこのような戦い方をするとは限りません

第5話

「おい」

「……」

「無視するなよ？」

「……」

「お前な、悪いと思ってるから無視してるんだろ？もういいからさ、無視はやめろ、無視は」

「ＩＳがなかったのだから仕方ないだろう！」

一週間前、箒が俺のコーチを買ってくれたのはいいが、やったのは剣道の稽古だけ。
しかも生徒である俺がコーチに指導という謎の仕様。
更に今になって逆ギレである。これはやめてほしい。

「なんか他にも出来ただろ？しかも俺は何も教えてもらってないってどういうことだよ」

「だからすまないと言っているではないか！」

一週間経って初めて聞いたわ！
あれか？痴呆か？アルツハイマーか？

「だから耳元であんまり大きな声出すなって。結構響くんだから」
「す、すまない……」
しかも剣道の稽古の時面を右側面で受けたら右の鼓膜が破られたって言うね。もうガンガンする。痛い。
「それでホントにどうするんだ？ぶっつけ本番は厳しくないか？」
「そのまま逃げるのか？」
「人聞き悪いこと言うな。なんとかするつもりだけど――」
相手は代表候補生。
初心者に負けるようなら名前負けだろう。
「歯切れが悪いな。心配ごとでもあるのか？」
「……ま、頑張るさ」
こいつに弱気なところを見せる訳にもいかない。
因みに俺の専用機は届いているらしく、そこに向かっている途中だ。
ウィン
縁起の良いドアの開く音がして、俺は第3アリーナのピットに入る。
「織斑くん、それはあまり面白くないと思いますよ？」
会って早々言うことがそれなんですか、山田先生。

俺はなかなかに秀逸な出来だと思ったのだが。
そしてやっぱり心を読むんですね。

「いや、良いんですけど……俺のＩＳは？」

「あっ、はい。これが織斑くんの専用ＩＳ『白式』です！」

「時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ、できなければ負けるだけだ。わかったな」

「ああ、わかってる」

俺のＩＳ、目の前にある白い機体の白式に触れる。
うん、大丈夫、出来る。
こいつと一緒なら負ける気がしない。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

白式に包みこまれ、一体化する感覚。
背中を預けた瞬間に白式が俺の体に合わせてくれる。
そしてハイパーセンサーがセシリアのＩＳ、ブルー・ティアーズを感知した。
こいつに任せておけば大丈夫だ。
触れた瞬間に今までずっと一緒にいた様な感覚に包まれたこいつなら、信頼できる。

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分はどうだ？」

「最高だよ。体に馴染んでくる。セシリアには悪いが勝てる気しかしない」

姉ちゃんは心配してくれてるのか？
まあ普段は厳しいけど俺のことを第一に考えてくれる優しい姉だからな。

「それくらい余裕があるということか。それなら大丈夫だな、行って来い」

「……箒」

「どうした？」

「――勝ってくる」

「当り前だ！誰が稽古をつけたと思っている！」

そうかい、ありがとよ。
ギュンと加速して、俺は背中に声を受けながらアリーナ内へ飛んだ。
そこには既にセシリアの姿が――ってハイパーセンサーで感知出来てたんだっけ。
確か中距離射撃型のＩＳだったな。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「ああ、悪いな。自分が負けるのが怖くて逃げて欲しかったか？」

「相変わらずお口は減りませんのね」

「真剣勝負だからな。いつもの学園生活とは違う。今のお前は――敵だ」

「そう……。――――では！」

――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初段エネルギー装填

セシリアの持つ六十七口径レーザーライフルであるスターライトｍｋ？から甲高い音と共に閃光が向かってくる。

「うおっ！」

危ない。
ＩＳにはシールドバリアーがあり、身体ダメージは避けられるのだが、シールドエネルギーがなくなると模擬戦では敗北。
つまりそう易々と敵の攻撃に当たるわけにはいかないのだ。

「初めてにしてはなかなか動けますのね」

嘲笑う様に、銃口を向けながら話し掛けてくる。
そりゃあこいつが俺に合わせてくれてるんだから、それに応えない訳にもいかないだろう。
さて、と。
ずっと攻撃をかわしている訳にもいかない。ＩＳにだって燃料はあるのだ。
そのために反撃できる武器を展開しようと思ったのだが――

「ふっ」

思わず笑っちまった。
まさかこんなところまで俺仕様か？
まったく、こりゃあとんだＩＳと出会っちまったもんだ。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘型装備で挑もうなんて……笑止ですわ！」

セシリアの言う通り俺の装備は近距離格闘型の武器、刃渡り１．６メートルほどの片刃のブレード。太刀だ。
しかもこれしかないのだというのだから、本当にお笑い草である。

「……なにを笑っていますの？」

「いや、な。楽しいじゃねェか、こういうの」

俺はいつもこうだ。
剣道の試合中に笑ってたら注意された事がある。
「お前は真剣にやっていないのか？」と。
しかしそれは間違いだ。真剣に取り組み、本気で打ち込んでいるからこそ楽しいと感じ、自然と笑みが零れちまう。

「さぁ……始めようぜ」

俺はその太刀を諸手中段に構え、セシリアに姿勢を真っ直ぐと向けた。

「言われなくともすぐに撃ち落として差し上げますわ！」

キュインキュインとセシリアの４機のブルー・ティアーズというファンネルの様なビットから撃ち出される閃光をすり足でよけながら、

徐々に徐々に間合いを詰める。
空中ですり足……些かおかしな表現だが、剣道の基本は足さばきなので仕方がない。
それは空中でも同じく、足さばきを適当にすれば勝てるものも勝てない。

「（しかし……間合いがわからんな。どこまで跳べるか）」

剣道だと剣先が少し離れた程度の距離なら一足で踏み込めるのだが、奈何せんＩＳは初めてなので自分の間合いすらわからない。

「隙だらけですわよ！」

右後方の通常では死角に位置していたところからのビットによる狙撃。
隙だらけとはなにを根拠に言ってるのか。
知らないだろうが俺の得意技は出鼻なんだぜ？

「やぁあああ！」

一機撃墜。
ビットから閃光が放たれる瞬間に、斬り込んで破壊した。

「なっ！？」

わかるんだよ、呼吸で。
どのビットからどのタイミングで出てくるか、セシリアの目を見ていればな。

「これくらい剣の道を歩んでいれば普通だぜ？さぁ、次来いよ」

ビットは見ずに、セシリアの目だけに集中する。
見たってどうせわからないんだ。それなら見なければいい。
いくらビットでも、マニュアルであり、オートではない。
それだけわかってるならセシリアに集中していれば完璧だ。

「小癪な――！！」

ビットからではなく、スターライトｍｋ？から放たれる閃光。
それを横にすり足でよけ、一気にセシリアの懐へと踏み込む。

「やぁあああああ！」

しかしそれだけで攻撃されるほどセシリアも甘くはなく、上空に移動してかわされた。
その直後の３機のビットからの一斉射撃。

「ぐふっ……！」

１つの閃光だけを避け、ジオンの量産型の様な悲鳴をあげ、白式のシールドエネルギーは大きく削られる。
こりゃあ一本取られた。
流石に３機同時射撃の全ては避けきれない。

「ツメが甘いんですのね」

「昔からよく言われるよ」

ああ、最高に楽しいぜ。
自分より強い相手と戦えるなんていつぶりだ？

感謝するぜ、セシリア。

「せやあああああ！」

そう言えばさっきからビットと射撃をなんで組み合わせないんだ？
そんなことされたら勝てない可能性がぐっと上がるんだが……手を抜いてる？
いやいや、こいつの性格からしてそれはない。
なら同時に制御は出来ない。つまりビットを操作する時は銃を撃てないということになる。
が、なんにせよ切り札は最後まで取っておくだろうから、そういう安直な考えは禁物だな。

「二機目撃墜」

「くっ……！！」

「三機目――――四機目！これで全部か」

周囲をキュインキュイン五月蠅かった蠅（ビット）を全て撃ち落とし、セシリアの方へ笑い掛ける。
蠅が甲高い機械音で鳴く時代なんて、イヤな時代だな。
多少攻撃は貰ってエネルギーは削られたが、まあ喰らわなかったら問題ないだろう。

「な、なんですの……！？」

そんなに不気味だったのか、青い表情で冷や汗を流された。
そこまで引かれるものかね。

「これで……決める！」

空を蹴り、一足でセシリアに向かって飛んでいく。
直線的、だがそれがいい。
剣の道は多くあるが、曲がったモノなどは一つもないのだから！

「――かかりましたわ」

ほへ？
声には出さなかったが、なぜか気の抜けた声を出してしまった。心の中で。
折角カッコいい台詞で決めようとしたんだからそれで終わらせてよ、という意味を込めて。
今の絶対勝ちフラグだったのに。

ヴンッ――――

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマーの突起が外れて動いた。

「おあいにくさま。ブルー・ティアーズは六機ありましてよ！」

さっきの４機とは違う、レーザー型ではない弾道型のビット。
その２つの砲撃が、俺の体を貫いた――――。

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを

押してください。

……はて？俺は負けたと思ったのだが、白式はまだ動いている。
そういえば姉ちゃんがそれと同じようなことを言ってたな。
取り敢えず言われるがままに確認ボタンを押すと、多量の情報が頭に流れ込んできた。
そのくせそれが自然と理解できてしまうというのだから、人間の脳は不思議である。
これを完全に解明出来る人間なんていないだろうな。

キィィィィン

ＩＳが光の量子へと変換され、また形を変えて整っていく。
新しく形成された装甲は今までのモノより機械的なごつごつが取れてシャープになっている。
丸くなったのにシャープ……これはいいな。
しかも序でに実体ダメージも消えるという効果付き。

「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）！？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

一次移行（ファースト・シフト）……確か本で読んだな。
使用者に合わせてＩＳが初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）するっていうのはつまりそういうことらしい。
これでやっとこの機体は俺専用となった。
それに武器もただの近接ブレードから雪片弐型へと変化している。
雪片……姉ちゃんの振るっていたＩＳ専用の武器だ。

「あーあ、姉ちゃんには敵わねェよなぁ」

強くて優しいただ1人の俺の家族。
そんな姉ちゃんの武器を俺は手にしているんだ。
「これで負けるとか笑えないだろ」
そう言いつつもやはり笑みが零れてくる。
自信……というよりは信頼。
白式からも、雪片弐型からも、姉ちゃんからも、箒からも。
「なにを言って――」
スパンスパンっ
有無を言わせず、瞬間的にセシリアの残りのビット二機を葬り去る。
「これで終わりにするぜ……セシリア！」
一気にブーストし、セシリアの懐に入り込む。
「うおおおおお！」
ズパンッ！
高圧なエネルギーを纏った雪片弐型による袈裟斬りの一太刀。
『試合終了。勝者――――織斑一夏』
それにより俺の勝利が確定した。

第6話

「うむ……まあ褒めてやらんこともないな」

約束通り勝ってきたっていうのに労いの言葉もなく上から目線ですか。

これはしつけが必要なんじゃないか？

「お前な……ほかになにかあるだろ？ほら、もっとさ。こう……せ――」

「（せ！？せ……？それは、あ、あの、ことか……？こ、心なしか薄っすら目を閉じている様にも見えなくもないな、うん。これは褒美だ。そうだ、褒美だ！私欲ではない！心頭滅却！）

ああ、少し眠いな。

うっかり立ったまま寝るところだったぜ。

ところで俺は箒になにを言おうとしたんだっけ？

思い出せないなぁ……

「ってどうしたんだ！？箒！？」

「お、お前がそうしろと言ったのではないか……」

はて、俺は箒になにをしろといったのか。まったく憶えてないぞ。

なにせ立ったまま寝掛けたんだからな。

しかしどうして箒は薄っすらと目を閉じながらこっちに迫って来て

いるのだろう。

「もしかしてお前も眠いのか？」

「……どういう意味だ？」

「そのまんまの意味で取ってもらって構わな――」

ズドンッ！

おいこら、さっきまでＩＳに乗って疲労困憊な健気な少年相手にいきなり竹刀で突きをかますな。
おかげで目がぱっちり爽快だぜ！じゃねぇんだよ。
しかも部屋の壁に穴開いたけどいいのか？これ誰が直すんだ？

「なんで突くのかな？」

少し箒さんの表情が恐いんだが、気のせいだと信じたい。

「理由は必要か？」

「当り前だろ？よく考えても見ろ。衝動的に殺しましたっていうより、なにか恨みがあって殺したって方が映えるだろ、画的に」

「ばらばらになったお前もそれはそれで映えそうだが？」

いや、参ったぞ。
これはどうしようもなく怒り心頭でござる。
対抗しようにも今は竹刀がばらしてあるから武器が無いんだよね、武器が。

「落ちつけよ、箒。俺は疲れてるんだ。寝かせてくれ」
「わかっている。すぐに永遠の眠りにつかせてやるから安心しろ」
これは本気でやばい。
イッツ・ガチ・タイム。
「穏やかじゃねぇなぁ。一緒に仲良く寝ようぜ？なんなら今日は一緒のベッドでどうだ！？小学校以来だな！ハッハッハ……」
流石にこれは無様過ぎる逃げ道だな。
こんなくらいで箒が許してくれるんなら全世界から戦争が無くなってるって。
「ふ、ふん！騙されんぞ！どうせそれも嘘なのだろう！？」
それ『も』ってなんだよ。
今日1日は感謝デーだったから嘘なんか吐いてないんだけど。
「本当だ！だからもう許せ！そして俺に快眠をくれ！」
「そ、そこまでいうのなら仕方がないなっ。き、今日だけだぞ……？」
おお、おおおおお！？
これくらいで許してくれるとか箒も丸くなったな。
いや、箒をこんなに丸くしてくれた人、誰か知らないが感謝するよ。
「おう、じゃあこっち来いよ」

「う、うむ……」

同じ部屋も同じベッドも大して変わらないから特に気にすることもないだろう。
いつも通り俺は反対側を向いて寝るだけ――

ピトッ……

なんだが、箒が背中をなぞってくる。
なにやら字を書いてるみたいだが……。

『たこもしたいのか』

……なんだそりゃ。なんて意味だ。
たこ？蛸か？それをやりたいってなんだ？蛸踊りをやれとでも言うのか、こいつは。
言っておくがそんなことする余裕があるなら俺はまだ寝ていないぞ。

「（『な、に、も、し、な、い、の、か』……と。な、なにもしないのか……？い、一緒に寝ると言っておった癖に――！）」

ゴスッ！

意味がわからんが痛みを我慢して俺は寝た。

「なぁ箒」

「……」

「おーい、なんで怒ってんだよ。昨日は散々殴った癖に」

昨日の夜な、あれから百回近く背中を殴られたんだよ。
俺はサンドバックじゃねェってのに、何回殴るんだよ。
せめて三度にしてくれよ。なんちゃって。

「……」

「俺がなにかしたなら謝るからなにをしたかくらい教えてくれ」

「何もしなかっただろうが！」

おおぅ、急にデカイ声出すからビックリしたぜ。
なにもしてないのになんで怒ってるんだよ。
人畜無害な一夏くんはなにもしないだけで怒られるんですか？

「あら、ごきげんよう、一夏さん」

「おお、セシリア、おはよう」

名前で呼ばれた事は気になるが、まあ懇意にしてくれるならそれでいいだろう。
朝から不機嫌な箒に上機嫌なセシリア。
俺としては是非ともセシリアと朝食をともにしたいものだ。

「箒、今日も和食セットでいいよな？」

「……ああ」

「どうしたんですの、篠ノ之さん。元気が無くってよ？」

「お前に話す義理はない」

「そうですか。それではわたくし、一夏さんとともに朝食を――」

「一夏は私と共に朝食を取る約束をしているのだが？」

バチバチと互いに視線で火花を散らし合う2人。
まさか俺は箒と朝食を取る約束をしていたのか。それは初耳だ。

「おばちゃん、和食セット2つ」

あの2人は無視だ、無視。
食卓で喧嘩するテーブルマナーすらもわかっていないヤツはちゃぶ台でもひっくり返してろ。

「わたくしは同じ専用機持ちとして一夏さんと放課後の訓練の話をしなければならないので」

「一夏の教官なら私で足りている」

そう言って一週間俺に稽古付けてもらって鼓膜まで破ったのはどこのどいつだ。
……あれ？鼓膜治ってる？なんで？
人間の生態はこれまた不思議だな。

「いただきます」

不毛な議論を眺めながら俺はクラスメイト数人と談笑しながら食事をした。

やっぱ食事は楽しくないとな。

「……あれ？一夏さん？」

「それにどうしてみんなもいないのだ？」

「「まさか――――ッ！？」」

この2人が後で姉ちゃんの制裁をくらったのは言うまでもないか。

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

クラス代表になったのは流れなんだが、こうやってみんなから祝われるのも悪くはないな。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」
「ほんとほんと」
しかしなんだこの異様な人数は。
クラスメイトだけだったら３０人しかいない筈なのに、余裕でその倍近くはいるぞ。
男のクラス代表ッてそんなに珍しいか？
いや、史上初だからそりゃ珍しいんだろうけどさ。
「っていうかお前らいつまで怒ってんだよ」
「怒ってなどいない！」
「そうですわ。別に一夏さんのせいで織斑先生から叩かれたなんて微塵も思っていません！」
そう思ってるからそうやって口を吐いて出てくるんだろうが。
いつまで根に持つんだよ。
しつこい女は嫌われるぞ。いや、知らんけど。
「もう悪かったって。はいはい、よしよし。これでいいんだろ？」
「な、なな、なにをするっ……！」
「そ、そんなことくらいで許すと思いまして！？」
なんだ、痛いから怒ってるんだと思って頭を撫でてやったらまた怒りやがった。
こいつらは怒る事しか出来ないのか。難儀だな。特に俺が難儀だよ。

「あー！セシリアも篠ノ之さんもずるーい！あたしもあたしも～！」

「じゃああたしは逆に撫でてあげよう」

うわっ、わしゃわしゃするな！

そして人の手を取って自分の頭に乗っけるな！

「「ふんっ」」

……ほら、俺が無視されるだろ？

こいつらホントに俺のこと嫌いだろ。間違いないぜ。

嫌いじゃないのに無視するなんて人としてどうかと思うもん。

嫌いだからって無視していいわけではないのだが。

「いてっ！」

無視ばかりではとどまらず、両サイドから脇腹を抓ってきやがった。

お前ら俺が抓り返しても良いのか？あ？イヤだろ？それならするな。

人の嫌がることはしちゃいけませんって昔教えてもらわなかったのか。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏くんに特別インタビューをしに来ました～！」

俺が痛みに顔を歪めているとふら～っとやってきた。

お恥ずかしいところを見られてしまった。

尻に敷かれているわけではないぞ？

「あ、私は黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はい

これ名刺」

「あっ、どうも」

お前らいい加減俺をつねるのやめてくれ。
平静を装って会話するのって結構辛いんだよ。
っていうかなんでこんなに怒ってるんだ。

「ではずばり織斑くん！クラス代表になった感想をどうぞ！」

クラス代表になった感想……ねぇ。
いまいちまだ実感が湧いてないんだよね。
みんなできゃいきゃいわいわいやってるだけだし、これといってなにもしてないしな。
クラス対抗戦もセシリアや箒との特訓でなんとかなるかもしれないし。

「クラスのみんなの期待に応えられるように頑張ります」

「う～ん、無難だねェ。もっとなにかないの？」

隣の二人から攻撃されて無難な事しか考えられないです、とは言えないよな。

「えっと……クラス代表として俺がみんなを支えます。って感じでいいですか？」

「いいよいいよー。そういうので。まああとは適当にねつ造しとくから」

ちょっと待とうか。
メディアがそういうことをするから民衆が本当に欲しい情報が届けられないんだよ。
それで叩かれたら俺のせいにするんだろ？それだけはやめてくれ。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

そう言う割には直ぐ近くで喉を鳴らしながら控えてたじゃねェか。
心なしかいつもよりしっかりとメイクしてるし。

「コホン。ではまず、なぜわたくしがクラス代表に立候補したということから――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

いや、立候補してたところから話してたらホントにいつまでかかるかわからないだろ。
こういうのはぱっぱと終わらせればいいんだよ、ぱっぱと。

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑くんに惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

そういう本人の望まないねつ造はやっぱり良くないと思うよ。

ほら、本人だって顔を真っ赤にして怒り心頭って感じじゃないか。
さっきまで怒ってたのに、更に怒らせたら手に負えないぞ。

「そんな馬鹿な」

仕方ない、ここは援護射撃してやるか。
だいたいこの前まで喧嘩してたのにそんなことあるわけないじゃないか。
困った先輩だぜ。

「えー、そうかな？」

「そ、そうですわ！なにをもってバカとおっしゃっているのかしら？」

あれ？俺は味方の筈だよな？
折角神風のように特攻して行ったのに背後から射撃されたぞ？
まさか日本軍の裏切りか！？

「だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず2人並んでね。写真撮るから」

「え？」

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショット貰うよ。あっ、握手とかしてるといいかもね」

「そ、そうですか……。そうですわね」

握手くらいなら問題ないかな。
なんか怒ってるけど大丈夫だろ。

「こんな感じでいいですか？」

セシリアの近くにより、手を取って体を寄せる。
写真撮るのに離れてたら余所余所しいからな。クラスメイトだし仲良さそうな雰囲気出さないと。雰囲気だけでも。

「いいよー」

「なっ、なな、な……！！」

「もう少し離れた方がいいか？」

「べべ、別にこのままでもよろしくてよ！？」

おおっ、それは良かった。
これで「もっと離れて下さいな。ふんっ」とでも言われようものなら俺は間違いなく凹んでいた。

「……」

ああ、なんだか知らないけどもう1人更に怒ってる人が無言で俺を睨んでくるなぁ。なんでかなぁ。
握手は日本の社交なんだから怒られる事でもないだろう。

「箒……お前俺とそんなに握手したいのか？」

「そ、そんなことはない！」

じゃあなんで怒ってるんだよ。
握手なんて減るもんじゃないし、いくらでもやってやるぞ、俺は。
なんたって人畜無害で徳量寛大だからな。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

はて、いくらだろうか。
写真撮るんだし、たぶんあれだ。２に決まってる！

「に～！」

「ぶー。７４．３７５でした～」

俺の満面の笑みの「に～」を返せ、「に～」を。
めちゃくちゃ恥ずかしいじゃないか。

カシャリ

それでシャッターが降ろされるわけなんだが、なんでか知らないが
１組のみんながカットインしてきた。
しかも箒までいる。
みんなは意外ではないけど、箒も入って来るなんて意外だ。
写真とかキライそうなのに。

「あ、あなたたちねぇ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

そう言われてみればそうだな。
みんなが写ってるのも悪くない。

「今日は楽しかっただろう。よかったな」

織斑一夏クラス代表就任パーティも終わり、部屋に帰ると箒がとげとげしく言ってきた。
こいつはいつまで怒ってるんだ。

「あ～……でも疲れたんだよ。じゃあ俺は寝るわ」

箒が変なことを言い出す前に寝てやるか。
こいつはなんか頭の良さと違ってバカなところがあるからな、うん。
さぁゆっくり快眠を――

「ぶほっ！お前なぁ……」

迎えることは出来ないらしい。
箒が顔面目掛けて枕を投げて来た。そのコントロールをもっと他のところで使えよ。

「い、今から寝まきに着替えるのだから向こうを向いていろ！」
「はいはい、わかりましたよ」
わざわざ俺がいるところで着替える必要があるのか。
歯磨きのときとか洗顔のときとかシャワーのときとか、俺がいない時に着替えればいいだろ。
なんで同じ部屋の中で着替えたがるんだ、こいつは。
1人で着替えると落ちつかない病気かなにかか？
「そう言えばなんでお前怒ってるんだよ」
「怒ってなどいない！」
これで怒ってないなら箒はいっつも怒ってないことになるな。
それはそれで不気味だけど。
「そんなに握手したいのか？今から握手した写真でも撮るか？」
「い、いいのか！？」
「お、おう……。それくらいなら朝飯前だ」
もう就寝前だけど、なんちゃって。
既に寝巻に着替えた箒のベッドに移り、携帯のカメラを向ける。
「帯変えたんだな」
「よ、よく見ているな」

「そりゃあ同じ部屋だし、箒のことはいっつも見てるよ」

「そ、そうか……」

おお、トゲトゲしかった箒さんが一気に丸くなったぞ。
人は褒めるものだな。

「もっと近寄れよ。っていうか顔が硬い」

「も、もっと！？」

「遠かったら入らないだろうが。体くっつけろ。俺の腕は伸びないんだ」

ゴムゴムの～って感じで伸びれば少しくらい離れてても問題ないんだけど、そうもいかないからな。
ギュッと体をくっつけて来た箒を見てみるが、やっぱり表情が硬い。

「笑えよ。ガッチガチじゃねェか。笑った方がかわいいんだから」

「か、か、かわいい……！？」

「あっ、その表情貰ったわ」

動揺している箒の表情もなかなか新鮮だと思い、俺はパシャリとシャッターを押した。
う～ん、我ながら写真のセンスを感じる。

「これいるか？」

「ぜ、ぜひ！せっかくだから待ち受けにでもしよう！」

「そこまで気に入ってくれたか。それはなによりだ。それじゃあおやすみ」

うんうん、やっぱり俺は写真の才能があるみたいだな。

箒の機嫌も治ったみたいだし、今日もゆっくり眠れそうだ。

第7話

「（ああ！一夏！一夏が……一夏がいつもここに……！）」

織斑一夏の幼馴染であり、寝食を共にするルームメイトであり、クラスメイトである篠ノ之箒。

その箒は昨日一夏と一緒に撮った写真を待ち受けにして顔を赤くしながら眺めていた。

同じ専用機持ちですら敵わなかった特権。それを今手にしているのである。同部屋ということを活かして。

「（ツーショット……ああ、一夏がいつも私に笑い掛けてくれている……）」

携帯の画面を見ながらその思いを胸にはせる。

一夏自体は基本的によく笑う性格なのだが、一夏がいない時でもこうして携帯を開けば一夏が笑っているのだ。

これほど幸せなこともない。

「（う、うむ。これは昨晩の礼だ。私欲ではない。ただの礼だ。礼）」

これはお礼だと脳を洗脳しながら、隣ですやすやと寝息を立てる一夏へと近寄る。

時刻は7時半。

いつもなら既に起きて、学校へ行く準備が終わっている筈なのだが、昨日のパーティで疲れたのか一夏はまだ目をさましていない。

寝ているところを襲うのは如何と思うが、これほどのチャンスと今

ほど箒を突き動かすものもない。
徐々に、徐々に箒の唇が一夏の唇へと迫り――

バンッ！

「一夏さんっ、朝食をご一緒に――――って篠ノ之さん！なにをしていらっしゃいますの！？それは卑怯というものですわ！」

しかしセシリアが突然の入室。
それにビックリして箒はオドオドとして一夏から離れて行く。

「ちっ、違う！これは、だな……その……」

「どうしたのですか？携帯片手に」

「こ、これはなんでもないぞ！？なんでもない！」

「まさか……寝顔の隠し撮り！？見せてください！削除しますわ！（こっちにデータを転送した後に、ですが）」

「だ、ダメだ！これは見せられない！」

「（朝からうるせぇ……。っていうかもうこんな時間か。さっさと着替えて飯食うか）」

2人の大声で起きた一夏は目を擦りながらちゃっちゃと準備を済ませ、騒ぐ2人を尻目に部屋から出て行く。
朝からあんなのを相手にしていたら遅刻して確実に織斑先生に怒られるから。

「あれ……一夏さん？」

「まさかまた――」

「隙あり、ですわ！」

「ああ！それは――！！」

「織斑くん、おはよー。ねぇ、転校性の噂聞いた？」

なんとか教室に間に合い、俺が席に着くと1人の女子がやってきた。
転校生って……この時期にか？
また変な時期に来る転校生もいたもんだな。
しかもここって編入試験が頭おかしいくらい難しいんだろ？それっ
てすげーじゃん。
というより編入試験なんて何処の学校も校内偏差より5くらい高く
設定してあるもんだけどな。それだけですごいよ。

「いや、聞いてないけど。今日来るのか？名前とかわかるのか？」

「中国の代表候補生ってことはわかってるけど、まだそこまではわ
かってないよ。今日来るみたいだけど」

中国かぁ。
それで思い出すヤツなら1人いるけど、あいつじゃないだろ。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」
なんでか朝から興奮気味の、そして上機嫌の、更になんでか怒っているセシリアが話題に介入してきた。
こいつは百面相かって思うほど顔面が器用だな。
「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐことの程でもあるまい」
箒は何故か少し落ち込んでいるようだけど、こいつはなにかあったのか。
どうせセシリアとまたもめたんだろうけど。
それなら怒ってる筈だけど……まあ怒ってないならそれでいい。
「どうしたんだよ、箒。元気出せよ」
「あ、ああ……
（はぁ……。せっかく一夏とのツーショットの待ち受けが、待ち受けが……うぅ……）」
「まあまあ、元気を出しなさいな、篠ノ之さん」
「くそっ……！」
こいつらやっぱり朝なにかあったんだろうな。
箒が落ち込む様なことに心当たりは……あれか？
「なぁ箒。間違えてデータ消したのか？また撮ってやろうか？」
「ほ、本当か！？」

急に元気になって、やっぱり原因はこれだったみたいだな。
写真くらいいつでもごじゃれよ。

「ああ、いいぜ。今日の夜でいいか？」

「そう、だな。うん、それがいい」

「それならわたくしともよろしいかしら？」

「そんなの――」

「おう。じゃあ夜そっちに行くから」

「一夏！」

上機嫌になったと思ったら急に大声出して怒りやがった。
意味がわからんぞ。どれだけ機嫌が変化し易いんだ。

「なんのはなしー？」

「いや、つーしょ――むぐっ」

「なんでもない！なんでもないぞ！」

「そうですわ！おほほほほ……」

こいつら、俺を殺す気か！？
口を塞ぐのは百歩譲って許そう。
しかしなぜ鼻まで塞ぐ？息が出来なくて窒息死するぞ。

「（話題を変えろ。さもなければ死ぬぞ？）」

「（さぁ、早くしてくださいます？）」

おお、怖い。

２人の圧力がビンビンと伝わってくるぜ。

それよりも箒の指が俺の口の中に軽く侵入してるんだが、これは喉をつぶして殺すという意味か？

その前に食いちぎってやろうか。

「そ、そういえば転校生ってどんなヤツなんだろうな、あはは～」

「……む、気になるのか？」

「お、おお、少しはな」

「ふん……」

なんだなんだ、人が折角要求通りに話題を変えたというのにその釈然としない態度は。

望む通りにやってもやらなくてもそんな態度取られたら、どうすればいいかわからなくなるぞ。

「今のお前に女子を気にしている暇があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

それとこれとは別な気がするんだけど。

「焼き餅ですか？」

「なっ……！！そ、そんなわけないだろう！」
「だよなぁ。そんなバカな話あるわけない――ぶほっ！」
「……ふん」
今度は頭にチョップが飛んで来たぞ。
俺の冗談はどうやら通じないらしい。困ったちゃんである。
「いてぇ……まあクラス対抗戦は勝つから安心しろ」
「当り前だ」
「そうですわ。わたくしが同じ専用機持ちとして特別コーチをするんですから、勝って当然ですわ」
「「むむむむ……！！」」
この2人は置いておこう。
こいつらに喧嘩に構っていたら命がいくつあっても足りない。
「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ」
「織斑くん、頑張ってね！」
「フリーパスのためにもね！」
「今のところ専用機を持ってるクラス代表って1組と4組だけだから、セシリアに勝った織斑くんなら余裕だよ」

クラスのみんなが優し過ぎる。
どっかの2人とは大違いで、優しく激励の言葉を、自然に掛けてくれる。

「――その情報、古いよ」

すげぇ聞いた事のある声が、教室のドアのところから訊こえて、教室内を支配した。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててそこにいたのは――

「鈴……だよな？久し振りだな。会いたかったぜ」

こんなところで逢えるとは何たる偶然。
思わず席を立って抱きついちまった。

「い、い、一夏！？」

「一夏さん！？」

後ろで喧嘩していた2人もそれに気付いてか、なんでか知らないが顔が白くなってた。
おお、呪怨のものまねか。すっげー似てるぞ。

「ちょっ、い、いきなり抱きつかないでよ……！」

「ああ、悪い。つい、な」

箒ほどではないが本当に久し振りだ。
しかしやっぱり公衆の面前で抱きつかれたのが気に食わないのか、顔を赤くして動揺しながら怒っている。
まあイヤだよな、普通に。幼馴染でも。
俺も好きでもないヤツに抱きつかれたらイヤだもん。うん。反省してる。

「ま、まあいいけどさ……！元気にしてたの？」

「おう、この通りだ。お前も元気そうでなによりだ。もしかして転校生ってお前のことか？」

「そうよ。中国代表候補生、凰（ファン）鈴音（リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「お前が、ねぇ。似合わねェな」

「な、なんてこと言うのよ！」

なんてことって、当り前のことだと思うけどな。
あの鈴が代表候補生って、似合う方がおかしいだろ。

「おい」

「なによ！」

後ろからの声に反応して怒鳴る鈴。こいつバカだろ。本気でそう思った。

パアンッ！

この世で最も他人の脳細胞を殲滅してきた女、織斑千冬の登場だ。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

なんという命令のマシンガン。

命令という名の銃弾は尽きることなく放てそうだ。

「す、すみません……」

なんで鈴は姉ちゃんにこんなに苦手意識を持っているんだろうな。

調教でもされたのか。

「またあとで来るからね。逃げないでよ、一夏！」

なんで俺が逃げないといけないんだよ。

こっちも久し振りに会って話したいこともあるっていうのに。

「……一夏、今のは誰だ？えらく親しそうだったな。知り合いか？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう御関係で――」

抱きついたのがまずかったか。

その他大勢からも集中砲火を受けていたのだが――

バシンバシンバシンバシン

「席に着け、馬鹿ども」

姉ちゃんが助けてくれた。

本人にはそういうつもりはないのだろうが、感謝の意味を込めて微笑みかけた。

パアンッ！

「お前もだぞ」

少し顔を紅くして、少し怒りながら殴られた。

弟が微笑みかける事さえも許さないというのか、この姉は……。

第8話

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

なんでもかんでも人のせいにするんじゃねぇよ。
午前中の授業で怒られたのはお前らがぼーっとしてるからだろうが。
だいたい姉ちゃんの授業の時に集中しないとかただの馬鹿だから。

「……はぁ。とりあえず飯食いに行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのならいいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

ああ、腹減った。
なんで授業受けてるだけなのにお腹ってすくんだろうね。
しかも3時間目辺りの空腹は異常。
4時間目は空腹を通り越して腹痛だよ。
そんなこと考える暇があったら学食へ行こう、ということで他にも
数人を引き連れてぞろぞろと学食へ向かった。
毎度こうなんだが、悪い気はしない。

「待ってたわよ、一夏！」

学食に着くなり、開口一番鈴が人差し指を突きたてて来た。
人を指でさすな、指で。

あとお前が「逃げるな」っていうから午前中の休み時間は移動しなかったのに、結局来なかったってどういうことなの。
因みに鈴の髪型はツインテール。箒と同じだ。
まあ箒がポニーじゃなくツインなのは昔色々あったからだな。うん。
俺の趣味の問題だよ。

「そりゃどうも。それはいいんだけどそこにいると他人に迷惑掛けるぞ？」

食券を渡そうにも鈴が立ち塞がって渡せない。
迷惑というかそこに立たれるのは邪魔だ。
たまに見かける変なところに立てられてる電柱くらいは邪魔。
え？なんでここ？ってところに生えてるヤツがたまにいるからな。

「わ、わかってるわよ！どけばいいんでしょ、どけば！」

そこまでは言ってないけどな。

「待ってくれるのは嬉しいんだけど先に食ってろよ。ラーメン伸びるぞ？」

「あんたを待ってたんでしょうが。なんで早く来ないのよ」

そう言われてもな。
こっちにもこっちの都合があるわけで。
それならお前が「逃げるな」と言ったんだから以下略。
しかし中華料理好きだね。俺も好きだけど。
あれはフランスと互角に張り合える唯一の料理だな。
日本？出身国補正があっても1位にはなれない。好きだけど。

「っていうかあれだ。お前は先に席に着いて飯食いながら待ってろ。のびたことまで俺のせいにされたら敵わん」

「わかったわよ、早く来なさいよ？」

「へいへい」

生返事を返して鈴を見送る。
はぁ、何故か背後からジト目の視線が送られてくるぜ。

「はいよ、お待ち」

「ありがと」

それから俺たち十数人は鈴が先に取っておいたテーブルに着き、各々が食事を始める。

「お前いつ帰って来てたんだよ。おばさんもおじさんも元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときビックリしたじゃない」

俺自身もビックリしたから鈴がビックリするのも当然だな。
そもそも俺がＩＳを動かせることすら忘れてたって、すげーバカだろ。

「一夏。そろそろどういう関係か説明してほしいのだが？」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃ

るの！？」

なんでだろう、いつもよりこいつらの連携が上手くいってるぞ。俺には悪い意味で。

「べ、べべ、別にあたしは付き合ってるわけじゃ……！」

「なんでそうなるんだよ。俺とこいつが付き合うって、どっからそんな発想が出てくるんだ？」

「抱きついていただろうが！」

「抱きついていたではありませんの！」

おおう、やっぱり今日のこいつらは息ぴったりだ。

この調子で仲良くなって貰いたいぜ。

「いや、あれは挨拶みたいなもんだろ。イギリスじゃ普通じゃないのか？セシリア」

「ま、まあ？普通ですけど……ではなぜわたくしとはそのような挨拶を交わしませんの？」

「それにここは日本だ！欧米ではない！」

ずずいと顔を近寄せてくるな、怖いから。

セシリアとはまだあって日が浅いし、そんなことしたら確実に殴られるだろうと思って。

そして箒。それについては本当に申し訳ないと思っている。

「まあ抱きついたのはあれだ。テンション上がってたからだよ」

「ほう。つまり私と再会した時はテンションがあがっていなかったと、そういうことか？」

あれれー？おかしいぞー？ｂｙバーロー。
そういう風に捉えられるとは思わなかったぜ。想定外だ。

「いや、そうじゃなくてだな。あの日は気分が……そう！気分が優れなかったんだよ。だから箒にうつしちゃまずいかな～っと」

「遺言はそれだけか？」

「いや待て！それだけはやめろ！」

いつでもどこでも出てくる箒さんの竹刀。
どこに隠し持ってたんだ。マジ半端ないっす。

パアンッ！

「っつぅ……」

「ふんっ」

竹刀だからよかったが、木刀だったら俺は今頃死んでいます。
そして俺じゃなかったら生命の危機です。
そこんところお忘れなく。

「それで、そちらの方とはどういった関係ですの？」

「まあ幼馴染みたいなもんだよ。なぁ鈴」

「……」

なんでか知らないけどこっちも怒ってる。
幼馴染でツインテールって言うのはあれか？無言の訴えをしてくる生物なのか？
よくよく考えてみれば箒と鈴の属性被ってるな、２つだけど。

「幼馴染……？」

ああ、まだ怒りが収まらない様子の箒にまた火が灯ったのが見えたぞ。
これは死亡フラグだと見た。
死を覚悟の上で説明を試みてみるか。

「箒が引っ越したのは小４の終わりの頃だろ？それで鈴が引っ越してきたのが小５の頭だ。それで中２のころまで一緒で、会うのは１年ぶりってわけだ」

そういえばこの２人はすれ違いだから面識ないのか。そうだったな。失念していた。

「それでこっちが箒。昔話さなかったか？小学校の頃からの幼馴染で、俺が通ってた剣術道場の娘」

「ふうん。そうなんだ」

今ので無視されてたら俺はこの場から確実に逃走していたと言い切れるぞ。
まあ返事をしてくれたのはいいんだけど、こいつらはなんでお互い

をジロジロと見ているんだろうか？
お互いに似てるから気が合いそうなのか？
そりゃあよかったぜ。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

……どうやら俺の予想は外れたらしい。
険悪だ。この２人は険悪なムードで睨み合ってる。
それなら同族嫌悪的なものなのか？
確かに幼馴染とツインテールという点では同じだが、同じ髪型なんてこの世には五万といるぞ。いや、ツインは希少種かもしれないけど。

「一夏、あんたクラス代表らしいわね」

「そうだけどそれがどうしたんだよ」

「ふーん……。そ、それならさ。ＩＳの操縦、見てあげても良いけど？」

鈴にしては珍しく歯切れが悪いな。麺が食いちぎれなかったか？なんちゃって。

「それは助か――」

バンッ！×２

助かるラスカルってつまんないことを言おうとしたから２人とも怒

ったのか？
それはすまなんだよ。

「一夏に教えるのは私の役目だ。教えるのは私だ」

「あなたは2組でしょう？敵の施しは受けませんわ」

ここからは3人の口喧嘩勃発。
やれ「付き合いが長い」だの、やれ「家で食事をした間柄」だの、
やれ「図々しい」だの、うるさくて敵わんわ。
楽しく談笑するのは結構だが喧嘩はやめてくれ。

「いっ、一夏っ！どういうことだ！？私は訊いてないぞ！？」

「わたくしもですわ！一夏さん、納得のいく説明を要求します！」

ああ、もう静かに飯を食わせてくれ。
えーっと、なんだっけ？なんで鈴の家で何度も食事をしているのか、
という内容だったか？

「鈴の実家は中華料理屋なんだよ。はい説明終わり」

興奮して顔を近づけてくる2人を軽くあしらい、また箸を進める。
チラッと様子を覗ってみたら箒とセシリアはホッとしていて、鈴は
むすっとしていた。

「ああ、そう言えばさ。おじさんは元気にしてるか？」

「あ……。うん、元気――だと思う」

なんだ、急に落ち込んで。
なんで「思う」なんだ？
よくわかんねぇけど、鈴がこういう態度を取るってことは聞かれたくないことなんだろうな。
深くは追求しない方がいいか。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久し振りだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとか」

「ああ、あそこなら潰れたぞ」

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから、積もる話もあるでしょ？」

なんだよ。なんだよ、その無理して作ってる笑顔は。
そんな顔してお前はなにがしてぇんだよ。

「あいにくですが――」

「いいぜ。放課後だろ。教室で待ってろ。絶対行くから」

「一夏！」

「悪い、今日は無理だ。ごめん、２人とも」

あんな顔されて放っておくなんて出来るわけないだろ。
俺は詰め寄る２人をなんとか封殺し、放課後に鈴との約束を取り付けた。

第9話

「鈴、待ったか？」

「う、ううん、ぜんぜんっ」

「そうか。よかった。じゃあ行くか、学食」

放課後、俺は約束通り2組の教室に鈴を迎えに行き、食堂へと向かった。

鈴におじさんのことを聞くつもりはない。

俺はこいつが自分から話してくれるのを待つだけだ。

久し振りにあったんだし、他愛もない話でもしよう。

「一夏さぁ、やっぱあたしがいないと寂しかった？」

食堂に着いてから直ぐ、唐突に口を開いた。

なんか自棄に機嫌が良いんだが、なにかいいことでもあったのか。

「まあな。そりゃ寂しいだろ。逆に寂しくない方が異常だと思うぞ」

友達が引っ越して寂しくないってどれだけ薄情なヤツなんだよ。

「そうだよねぇ。それでそれで？」

それで？はて、ここからどう会話を発展させろと仰るのか。

しかもやっぱり機嫌が異常なほどに良い。怒っているのも嫌だが、

こうも上機嫌だと逆に不気味だ。

「それで……だな。なんていうか、見ない内にかわいくなったな、鈴」

なんていうか、中学校の頃にはなかった『女の子らしさ』が漂っている。
高校生ともなるとやっぱり人は変わるものだな。箒もかわいくなってたし。
いや、昔から2人ともかわいいとは思ってたぞ。

「か、かか、かわいい！？う、うそ……じゃないよね？」

「そんな嘘吐いて誰が得するんだよ」

嘘っていうのはな、人を幸せにする為にあるものなんだよ。
人を傷付ける嘘は嘘とは言わないのだよ。わかったかね諸君。

「そ、そう……。――――あっ」

「どうした？」

「そういえばあの幼馴染って子、あたしとキャラ被ってない？」

それは俺も思ってたが口にしたらダメだと思ってた。
まさか俺の好みで褒めて以来、箒がずっとツインテールにしてるとは思わなかったから。

「そうか？髪型とポジションだけだろ。他は全然違うと思うけどな」

どっちも我が強い性格だけど……あれ？これも同じだな。

まあ他にも色々と違うところがあるし良いんだよ！グリーンだよ！

「じゃ、じゃあ……さ。あたしとあっちの子、どっちが……か、か、かわいい？」

なんで声を裏返らせてるんだ？

どっちがかわいいかって言われてもどっちもかわいいとしか言えないんだが、どうしたものか。

あの２人もなんか知らんがついて来て陰から見てるし、どっちか片方の名前だけ出すのもダメだよな。

「俺は姉ちゃんが一番綺麗だと思うぞ」

シスコンではない。もう一度言う、シスコンではない。

これは逃げ道として活用させてもらっただけである。

最後にもう一度。シスコンではないぞ？

「……」

うわぁ、という様な目で軽く引きながらこっちを見てくる女３人。

自分でもこれは失敗したと思わされる。

「まああれだな。うん。あれだ。あれなんだよ。あれだよ。あれあれ」

「……はぁ、わかったわよ。言いたくないんでしょ？」

うげっ。なんでばれたんだ。

俺のあれあれ詐欺がこうも簡単に破られるとは。

幼馴染恐ろしいな。

「あんたさぁ、言い訳する時いっつも千冬さん出すわよね」
「そうか？」
取り敢えず姉ちゃんの名前出しておけば安全な事が多いからかもしれないな。
姉ちゃんにはいつもホントにお世話になってる。今度お礼にドイツビールでもあげよう。
「そうよ。もしかしてシスコン？」
「そんな馬鹿な。姉ちゃんに恋をするほど子供じゃないって」
「その姉ちゃんっていう呼び方が更に加速させてるわよね」
それを言われたら困るんだが。
今度からなんて呼べばいいんだ？お姉ちゃん？姉様？姉上？姐御？姉貴？
どれもしっくりこないんだよ。やっぱ姉ちゃんは姉ちゃんだろ。
「まあいいんだけどさ。――――ところで約束憶えてる？」
「約束？」
「う、うん。覚えてる……よね？」
心なしか照れてるように見えるな。
そんな恥ずかしい約束か？
俺が思い当たる約束なんて１つしかないんだけどなぁ、違うのか？

「あれか？鈴の料理が上達したら毎日俺に酢豚を食わせてくれるってヤツ」

「そ、そう！それ！」

ガタタッ

あいつらなにやってんだ。そんな音立てたら盗聴してるのばれちまうぞ。
しかし今の鈴にはそんなことはどうでもいいみたいで。

「食べて……くれる？」

「ああ、いいぜ。でも流石に毎日酢豚はきついからな。他にも食べさせてくれよ」

「も、もちろんよ！任せて！」

おおっ、めちゃめちゃ元気出て来たな、鈴のヤツ。
俺が約束を憶えていたことがそんなに嬉しいか。そうかそうか。
まあ約束を忘れるほど人間腐っちゃいないからな。

「それで、いつから食べさせてくれるんだ？」

「い、いつからって、一夏がいいならあたしはいつでも……」

「そういうわけにもいかないだろ。ほら、ここにいる間は食堂とかもあるし、高校出てからとかの方が良いんじゃないか？」

「そ、そうね。まだ一夏も１８になってないしね」
俺が１８になるのと毎日飯を食わせてくれることになんの関係があるんだ？
……ん？１８？
それで毎日飯って……まさかな。ハハハ……嘘だろ？

「……なぁ鈴」

「なになに？」

やべぇ、こんな上機嫌の鈴を相手に今更切り出すことなんて出来るのか？
いや、やらねばならん！男として！ズルズルといくのだけは鈴に失礼だ！

「悪い。俺勘違いしてたわ」

「……へ？」

「いやさ、毎日飯食わせてくれるって、俺が1人暮しをしてても体調を崩さない様にヘルパーみたいなことしてくれると思ってたんだ。でもあれだろ？お前が言うのは、その……うん。なんていうか……結婚？みたいなことなんだろ？ホントにごめん！」

俺がそう言った瞬間に鈴の顔が真っ赤に染め上げられた。
そりゃあ怒って当然だよな。約束を勘違いして、ぬか喜びさせちまったんだ。
ここで死ぬのなら男として悔いはない！さぁ殺れ！

「べ、べべ、別に勘違いじゃないわよ！？そ、そう、そういうことよ！あんたが無理しても平気なように差し入れ的なことをしようと思ってただけだから！な、なに勘違いしてんの！？ば、バッカじゃない？」

しどろもどろに、鈴はやっぱり顔を紅くして言ってきた。
やっぱりそういうこと――――え？

「ホントか？俺はてっきり――」

「だ、ダメ！それ以上言わないで！」

……どうやら俺は人生初の修羅場をくぐりぬけたらしい。勘違いだったんだけど。
しかし『結婚』っていう単語に過剰反応するあたり、やっぱり俺の思い違いだったみたいだな。
あー、よかった。助かった。平和だねェ。

「いやぁ、今日は悪かったな、勘違いなんかして」

「そ、そういうこともあるわよ！人間だもの！」

喋り方おかしいけど大丈夫か？
いつまでそんなにキョドってるつもりなんだよ。

「それじゃあ俺は帰るわ。たぶん箒が部屋で待ってるし」

ピシッ

背後で何かが固まる音がしたけど気のせいだと信じたい。これは幻

聴。

「今、なんて言った？」

ギギギ、と錆びた機会が擦れる様な音を出しながら鈴は落ちつき払ってこっちを見ている。

さっきまでの上機嫌は何処へ行ったんだ。

「いや、箒が部屋で待ってる――」

「2回も言わなくて良い！」

お前が言えっていったんだろうが。

どんな屁理屈だよ、そりゃあ。

「ちょっと待ちなさい！それどういうことよ！」

「いや、俺は今箒と同じ部屋なんだよ」

「……は？」

「だからな、俺の入学は少し特殊だったから別の部屋が用意できなかったらしいんだよ。それで今は箒と同じ部屋というわけで――」

「そ、それってあの子と寝食を共にしてるってこと！？」

うーん、まあそうなるのかな。

飯食う時はいっつも一緒だし、背中を殴られながら寝た記憶もあるぞ。

「そうだな。まあ箒で助かった。顔も知らない様な女子と一緒だったら今頃睡眠不足で倒れてるぜ」

「……そう。幼馴染だったら良いわけね？」

「いや、まあ……そうだな」

幼馴染だったら良いという問題でも無い気がするが、鈴の気に圧されて思わずイエスと言ってしまった。

「一夏、幼馴染は2人居るってことをよく憶えてなさいよ！」

「……お前のことは一度も忘れたことないぞ？」

「そ、そういう意味じゃないのよ！ったく、あんたは、もう……！」

箒のことも忘れたことはないぞ。
幼馴染のことを忘れるヤツとか最低だからな。
それにしてもなんで鈴は顔を真っ赤にして怒ってるんだ？
今の発言に怒らせる要素はないと思うのだが……は！？
もしかして今のに箒の名前が入ってなかったから、箒のために怒ってるのか！？
お前……すげぇ良いヤツだな。見直したよ。幼馴染同士仲良くしようと思ったわけだな。偉いぞ、鈴。

「な、なにすんのよ！」

「は？いや、すまん」

褒めるために頭を撫でたら全力で拒否された。

俺とコミュニケーションは取れないというのか、くそっ……！

「と、とにかく憶えてなさい！じゃあ後でね！」

「おう……後？」

鈴の背中を見送りながら、俺は鈴の言葉に首を傾げた。

「というわけだから、部屋変わって」

「ふっ、ふざけるな！なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！」

後でってこういうことか。

まったく、ここは俺の出番だな。ミスター穏便の。

「仕方ないな。ここは俺が出て行くということで穏便に――」

「「それはダメ！」」

……解せぬ。

俺がいなくなればなにもかも丸く収まるんじゃないのか？

「いやぁ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うし、のんびりも出来ないし。そこら辺あたしは平気だか代わってあげようかなって思ってさ」

「べ、別にイヤとは言っていない……。それにだ！これは私と一夏の問題だ！部外者が首を突っ込んで欲しくない」

「大丈夫、あたしも幼馴染だから」

「だから、それが何の理由になるというのだ！」

やれやれ、ここはやはりミスター穏便――

「「一夏は黙ってろ！」」

……まだ喋ってないのだが？

しかし、鈴のヤツ荷物まで持って来てないか？

でもここで喋ったら封殺されるかもしれないし……いや、物は試しだよ。

「鈴。それ荷物全部か？」

「そうだよ。あたしはボストンバック１つあれば何処へでも行けるからね」

流石ミスフットワークだな。

俺もその身軽さが欲しいぜ。

道着って意外と嵩張るんだよな。しかも畳むのがめんどくさい。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「も」ってなんだ「も」って。

もしかして３人で暮らす気か？そんな無茶な。

「ふっ、ふざけるな！出て行け！ここは私の部屋だ！」
「一夏の部屋でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」
俺は止めてもらってる様な部分が多いから、そこら辺は何とも言い難いな。
甲乙つけがたいとはこのことか。違うけど。
そして俺に話を振る様にこっちを見るな。
さっきは封殺したくせに。
「やはりここは穏便に俺が———出て行きませんよ、はい」
ついに無言の眼差しによって俺の意志は喰い殺された。
「とにかく！部屋は代わらない！出て行くのはそちらだ！自分の部屋に戻れ！」
「ねぇ一夏。そういえば話し忘れてたことがあるんだけど——」
「む、無視するな！ええい、こうなったら力づくで……」
冷静さを失った箒はいつでも俺を殴れるようにとベッドの傍に立てかけてあった竹刀を取り、振り被る。
ああ、もうなにやってんだ！
パシィンッ！
「———っつぅ。大丈夫か、鈴？」

「べ、別に助けてもらわなくても自力で如何にか出来たわよ！」

「はいはい。悪かったな、邪魔して」

叩かれたのは鈴ではなく、俺の腕。

打たれ慣れてるとはいえ、やっぱ全国1位の打撃は痛いな。

「あっ……あ……」

「落ちつけ、箒。どうしたんだよ、お前らしくない。竹刀で生身の人間を叩く事がどれだけ危ないことか、剣道をやってるお前ならわかるだろうが」

「……」

無言の動揺。

自制心を失った自分が恥ずかしいのだろう。

「……はぁ」

ビクッ

俺の溜め息に過剰に反応する箒。

別に呆れたとかそういうんじゃなくて、ただ一息ついただけなんだけどな。

「鈴」

「なによ？」

「取り敢えず今日のところは引いてくれ。箒には俺がしっかり言い聞かせとくから」

「まだ――」

「いいから。おやすみ、鈴。また明日な」

「わ、わかったわよ！じゃあね、おやすみ」

そう言って鈴は釈然としないままに自分の部屋へと帰って行った。

「箒」

ビクッ

……俺ってそんなに怯えられる対象か？

哀しくなってくるんだが。

「気にすんな。今日はもうゆっくり休んで頭冷やせ」

「……怒らないのか？」

オドオドとした様子で、箒はベッドに転がる俺を見てくる。

「怒ってるよ。竹刀で防具をつけてもいない人を叩くなんて論外だ。あれは武器だってことを理解しとけ。殺そうと思えば人なんか簡単に殺せるんだ」

防具の上からでも死ぬことがあるっていうのに、生身だとホントに危ないんだよ。

しかもさっきの箒みたいに試合ではない暴力的な打撃や突撃は特に。冗談半分でやられるのも危ないが、軽いお仕置き程度で俺が叩かれるのは危険でもなんでもないけどな。

「それをしないために、正しく扱うための剣道だろうが。竹刀は武器であり、道具であり、自分の心を写す鏡なんだよ。覚えとけ」

受け売りだけどな、誰かさんの。

さぁて、もう疲れたし、寝ようかね。

「また、私は――」

ああ、もう！こいつは人が寝ようとしている傍でごちゃごちゃうるせぇなぁ！

バシッ！

「いたっ！な、なにをする！」

チョップだ。脳天への。言わなくてもわかるだろ。

「叩かれたお返しだ。もういいから早く寝ろ。いくらでも付き合ってやるから」

「つ、つ、つ、付き合う！？」

「ああ、稽古なら――ごふっ！」

「ふんっ！

（期待した私が馬鹿だった！一夏に限ってそんなこと言う筈がない

ということはわかっているのに……くそっ！しかし……あれだな、うん。いつまで経っても一夏は変わらず、その……か、かっこいいな、うん。いつも私のことを気遣ってくれているし、そばにいてくれる。優しいところも変わってないな。その、だな……。私はそんな一夏が……だ、大好き……だぞ？）」

なんだよこいつ……。

人が折角気を遣ってやったっていうのに、顔を真っ赤にして怒り心頭でいきなり鳩尾殴ってきやがった。

まあ元気も出たみたいだし、これでいいか。

第１０話（前書き）

今回は原作とあんまり変わりません

第１０話

クラス対抗戦試合当日、第２アリーナ第１試合。組み合わせは俺と鈴。
噂の専用機持ち同士の対決だからか、アリーナの客席は満員御礼。
「（ふむ……お互いに手加減はなしで、ということだったな）」
試合開始のときを待つ鈴とそのＩＳ『甲龍（シェンロン）』を見ながら先日のことを思いだす。
対戦表が決まった時の話なのだが、どういうわけか知らないが『あたしが勝ったら一夏と同じ部屋。一夏が勝ったら篠ノ之さんが同じ部屋のままでいいわ』という変な約束を取り付けられた。
そう言うのは直接２人でやればいいのだが、そうもいかないので箒の代役は俺。
ここでわざと負けようものなら箒から非難を浴びさせられるので、手加減は出来ない。
それにしてもシェンロンってあれだな。
７つボールを集めたら出てくる国民的漫画のあれみたいだな、全然違うけど。
『それでは両者、既定の位置まで移動して下さい』
アナウンスに促されて、俺と鈴は５メートルの距離を置いて向き合う。
正直この規定距離は中距離射撃型には不利だよな。
立ち上がりを一気に責め立てられたら終わりだし。

まあ俺も鈴も近距離格闘型なわけだから関係ないけど。

「一夏、あんたがわざと負けてくれるなら手加減してあげても良いわよ」

「はぁ。いらねぇよ、そんなもん。そもそも箒とは関係なしに、俺は勝ちたいからここにいるんだよ」

みんなの期待を背負ってるわけだしな。
負けるわけにはいかないさ。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

別に攻撃力だけってわけでもないだろ。
シールドエネルギーを突破する技法――セシリア戦でも見せた零落白夜――があれば可能ってわけだ。
まあ本体にダメージを与えるためではなく、絶対防御を発動させてより多くのエネルギーを削り取るためにやるわけだが。

『それでは両者試合を開始してください』

ブーッとブザーが鳴った瞬間、俺と鈴は動いた。

ガギンッ！

先手必勝。
俺は即座に雪片弐型を展開して、鈴に斬り掛かったが、それは物理的衝撃で弾かれる。

「まあそう来ると思ってたわ。相手の手札がわからないうちから自分の手札は切らない主義だもんね」

まあ手札――切り札と言っても俺には出鼻と零落白夜しかないわけだが、そうあっさりと読まれるとは思わなかった。
それに鈴の手法もわからないし、いきなり出鼻が出来るほど甘くはない。
そもそも出鼻は相手の攻撃方法が限られた時にしか使えないからな。
剣道然り。

「なんでもお見通しってわけか」

鈴の手に持たれるそれを観察しながら笑い掛ける。
ああ、今日も楽しいぜ――じゃなくて、鈴の持つ武器の観察しないと。
バトンの両端に刃が着いた様な異形の薙刀。

「それじゃあこっちからも行かせてもらうわよ！」

それが鈴の手によって縦横無尽に自在に角度を変えながら切りこんでくる。
しかも高速回転している分、捌くのは簡単ではない。

「（このままじゃじり貧だな……）」

互いに有効打を与えられず、金属音だけがアリーナ内に響く。
俺はどうにか打開しようと一歩引いたが、これがまずかった。

「――甘いっ！」

鈴の肩のアーマーが開き、中にある球体が光ったと思った瞬間、見えない何かに殴られた。
ぐらっと意識がブラックアウトしそうになるが、慌てて体勢を立て直すも、時既に遅し。

「今のはジャブだからね」

楽しそうに笑いやがった、こいつ。
つまりあれか。次は本命ってわけですか。

ドンッ！

またも見えないなにかに殴られ、その衝撃はシールドエネルギーを貫通していた。
しかもいきなり76も削ってくるとか笑えないんだが。状況的にも。

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

見えないなにか――龍砲というらしい――の性質はだいたいわかった。
鈴の言う通り砲弾も砲身も見えない衝撃砲。軌道は直線的。
まあ目を見てればだいたい次にどこら辺からどの位置に撃ってくるかはわかるし、ハイパーセンサーも空間の歪みを感知してくれるから然程問題ではないが、いかんせん距離が詰められない。

詰めようとすれば衝撃砲が待ち構え、詰めたら詰めたで青龍刀が襲い掛かってくる。
誰だよ、こんな無理ゲーつくったヤツは。出て来い。

「……はぁ。鈴」

「な、なによ」

「悪いな。これで終わりにさせてもらうぜ」

チャンスは一度きり。
瞬時加速と零落白夜を組み合わせ、これで半分以上エネルギーを削る。

「うおおおおっ！」

一気に加速し、Gによって意識がブラックアウトするのをＩＳの操縦者保護機能が防ぐ。
いける！
そう確信した瞬間だった。

ズドォォォォンッ！

なにかがアリーナに墜落し、邪魔しやがった。
おいこら、人の真剣勝負を邪魔するなんて、どういう了見だ。

『一夏！試合は中止よ！ピットに戻って！』

『ああ！？あいつをとっちめなきゃ気がすまねぇんだよ、俺は！』

――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。こちらをロックしています。

ＩＳ？

つまりアリーナのシールドを突破できる攻撃力を持ったＩＳがこっちをロックしてるってことか。

ほほう、上等だ。その喧嘩買ってやるよ。

『一夏、早く！』

「ああ！うるせぇよ！黙ってろ！あいつは俺が斬る！」

「何言ってんのよバカ！正体不明のＩＳなのよ？勝てると思ってんの？」

「知るか。勝てばいいんだろ、勝てば」

「出来るわけないでしょ。あたしより弱いくせになに言ってんのよ！」

人が気にしていることを簡単に口に出してくれるね、お前は。

男が女より弱いって恥だろ。

「あいつが俺より弱い可能性に賭ける。うん、それだ」

「はぁ！？あんた頭おかしくなったの？シールドを突破できる攻撃力を持ってんのよ？弱いわけないでしょ」

それもそうだ。

しかしあいつは俺の真剣勝負を邪魔しやがった。

それだけは何があっても許さんぞ、正体不明のＩＳ。

「だいたい――」

「あぶねぇ！」

……あいつはもう絶対許さねェ。
俺の邪魔をした挙句鈴に攻撃？
舐めた真似してくれるじゃねぇか。
俺が鈴を抱いてかわしてなかったら今頃どうなっていたことか。

「ちょ、ちょっと、バカ！離しなさいよ！」

「暴れるなって。いてっ、殴るなバカ！」

「う、うるさいうるさいうるさい！」

お礼のかわりに顔面パンチって、全然嬉しくないぞ。

「だ、大体、どこ触って――」

「来るぞ！」

またも放たれるビーム砲。しかも連射。
そのお陰で煙が晴れて、その射手であるＩＳがふわりと浮かびあがった。

「……ふむ。猿みたいなヤツだな」

深い灰色をしたＩＳは手がつま先より下に届いており、首がなく、

頭と肩が一体化している。
しかも全身防具（フルスキン）。顔だしＮＧなのか？
全身のスラスター口、頭部のセンサーレンズ、腕には４つのビーム砲口。

『織斑くん！凰（ファン）さん！今直ぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

「――いや、俺が倒すんで結構です。そういうことだから鈴、サポートよろしく」

「わかったわよ！だ、だからさっさと離しなさい！」

「おお、悪かった」

さて、あいつは俺を怒らせやがった。
愉快犯だとしても――そんな可能性０だが――許さねェよ。

「行くぜ、鈴」

キンッと切先を当てるのを合図に、俺と鈴は即席のコンビネーションで飛び出した。

怒ってはいるが、その怒りにまかせて剣を振るうほど俺も子供ではない。
箒に説教した手前、そんなことが出来るわけないだろ。

心を落ち着けて、俺の間合いから外さずに斬り込む。

ガキンッ！

「お前の間合いにさせると思うか？」

雪片弐型で、着実に相手のシールドエネルギーを削っていく。
鈴の衝撃砲のサポートもあるので、ほんとんど俺の一方的な攻撃。
暴力ではない。ここ大事。
こいつの間合いにさせたら大変なんだよ。
ただでさえ長い腕を広げてコマみたいに回って、しかもビームまで撃ってくる。
リーチが長いというのは有効だが、その分短いリーチの敵に懐に潜り込まれると弱いものだ。
だから絶対に俺の間合いからは外させない。

「あっ！」

「なにやってんのよ、バカ！」

「いや、すまん」

いやぁ、しまった。逃げられた。
つまり相手の間合いでもう一回戦って、俺の間合いに引きずり込まないといけない。
これ結構大変なんだよなぁ。

「そういえばさ、あいつってアシモみたいだよな」

なんとなく思ったことを言ってみた。

「アシモ？なにそれ？」
しかし伝わらなかった。
アシモはアシモだろうが。本田さんのところのロボットだよ。
「知らないならいいや。こう、動きがかっくかくのロボットみたいだってことがわかってくれたらいい」
「それがどうしたのよ」
「わからないかね。人の動きをしてないってことだよ」
そもそも、だ。
人なら呼吸がわかるんだが、どうもあいつのはわからない。顔が見えないせいかもしれないけど。
規則性のある動きを推測して立ちまわっていたからいいものの、やりにくいんだよなぁ。
「は？人が乗らなきゃＩＳは――」
そこまで言って鈴は何かに気付いた。
「そういえばあれ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……。ううん、でも無人機なんてありえない。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」
それくらいなら俺も教科書で読んだから知ってる。
しかし、理屈じゃどうにも説明できないのもＩＳだ。

理論がわかってるのは開発者である束さんだけだろうからな。
「まあそうだけどな。取り敢えず無人機って仮定してやろうぜ。それなら楽勝だ」
「どっからその自身が生まれてくるのよ」
簡単だ。人間の場合は相手が何をするか理解して動かなければならない。
それが機械なら相手に動きを先読みして攻撃できる。
つまり俺は絶対に攻撃を外さない。
「いいから。俺が合図したら取り敢えずお前は俺の背中に向かって全力で衝撃砲を撃ってくれ。それで作戦は完璧だ」
「は？死ぬ気？」
「もう説明するのが面倒だ。それでいいよ、死ぬ気で。守ってやるから黙ってついて来い」
「……はぁ。わかったわよ。撃てばいいでしょ、撃てば」
俺の間合いに詰めるまでにエネルギーを消耗し過ぎて足りないんだよね、零落白夜の出力が。
いや、正確には足りているが、瞬時加速のエネルギーが足りない。
それは外部エネルギーでも賄えるんだ。原理は説明しない。みんな知ってるだろうから。
「来い！」

ズドンッ！

背中に衝撃砲を受けて、そのエネルギーにより瞬時加速を発動させる。

「――オオオッ！」

諸手で持つ雪片弐型が強く光を放ち、一回り大きいエネルギー状の刃を形成した。

――零落白夜を使用可能。エネルギー転換率１００％

そんなことは聞くまでもなく感覚でわかってる。

世界全体を把握出来る様なクリアーな五感。

集中力が数十倍にも跳ね上がった様な高解像度の意識。

これだけ多くの仲間に支えてもらって勝てなかったら恥だろ。

「（姉ちゃんも、箒も、セシリアも、鈴も守ってやるさ。俺と白式で）」

ズパン！

必殺の一撃は敵ＩＳの右腕を切り落とした。

しかしその反撃として左拳を俺に突き付け、ゼロ距離でビーム砲を叩きこみたいらしい。

「ふっ……」

甘いんだよ。

所詮は機械。その程度の動きは想定済みだって、何度言わせるんだ。

ビュンッ

敵ＩＳから放たれるそれをダックインでかわし、あまりあるエネルギーをもった雪片二型で今度は突撃を行った。

「……やっぱ人は乗ってなかったみたいだな」

相手の喉を貫いた雪片二型を抜きながら、その中を確認する。
まさかとは思っていたが、ホントに無人機かよ。

――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！

「マジかよ！？」

これだけやってもまだ動くのか。恐ろしいな。
勝ったと表油断していた俺は、残った左手を最大出力形態に変形させたＩＳに反応出来るわけもなく、それから放たれる閃光に有無を言わせず呑みこまれた。

第１１話（前書き）

箒さんは大変なフラグを立てたようです

第１１話

「っつぅ……」

体全体が痛い。

結局あの後どうなったんだ？全然憶えてないな。

今は保健室っぽいところのベッドで寝てたみたいなんだけど、ええっと……。

「気がついたか」

シャッとカーテンを開けて入って来たのは見るまでもなく姉ちゃんだろう。

「体に致命的損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

「はぁ……」

慣れろって、この体全体が軋む様な感覚に慣れることが出来たら俺は最強の戦士になれるだろうよ。

姉ちゃんの出席簿アタックや箒の竹刀での面打ちも痛くも痒くもなくなるってもんだ。

「衝撃砲の最大出力を背中から受けたんだぞ。しかもお前、ＩＳの絶対防御もカットしたな？よく死ななかったものだ」

それは我ながらすごいな。

確か絶対防御ってカットできないシステムの筈なんだけど、そこら辺は気合で解除したんだろう。

「まあ何にせよ無事でよかった。家族に死なれては寝ざめが悪い」

「うーん、俺もかな。家族を残して逝っちまうなんて出来ないし。それに鈴や箒も、ああ、あとセシリアもいるしな。そう簡単には死ねないさ。それと心配掛けてごめん。あと心配してくれてありがと」

一瞬きょとんとしたあと、姉ちゃんは小さく笑った。

「心配などしてないさ。お前はそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな」

その言葉が、たまらなく俺の心をくすぐった。
それが姉ちゃんの照れ隠しだとはわかっているけど、変だけど褒められたことが嬉しくて、体が熱くなってくる。
……やっぱりシスコンなのかな、俺。
変なことが心配になって来たぞ。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

俺が照れてるのがわかったんだろうな、姉ちゃんは悪戯っぽく笑いながら保健室を後にした。

「あー、ゴホンゴホン」

もう少しまともに入って来れないのかと思うが、まあ箒だしな。仕方ないか。

「よう箒」

「う、うむ」

さっき半分まで開かれたカーテンをこいつはなんでか知らないが全開にした。
なんのためだ？
しかし怒ってるわけでも上機嫌なわけでもないこの中途半端な機嫌はなんなのだ。

「あ、あのだなっ。今日の戦いだがっ」

「うん」

「お、お前はいったいなにを考えているんだ！」

「……は？」

「勝てたから良い様なものの……あんな事故、先生方に任せておけばいいだろう！過剰な自信は身を滅ぼすという言葉を知らんのか！」

心配掛けちまったんだな、こいつに。
そりゃあ悪いことをした。

「すまん。でも俺はあいつが許せなかった。……あ、でも怒りにまかせて剣をふるってはないからな？」

「そんなことはいくらでも後付けできる！」

確かにその通りだな。
でも信じてくれても良い気がするんだけど。

「……はぁ。ありがとな、箒」

「な、なにがだ？」

「そうやって俺のために怒ってくれるのと、心配してくれたこと。
すっげー嬉しいよ」

「べ、別に私はそんなこと……！！」

「違ったのか？」

「違うに決まっている！」

そうか。それはまた勘違いをして悪かった。
そして勘違いして満面の笑みを向けてしまった俺が恥ずかしい。
そんな俺を見て箒も顔を真っ赤にして恥ずかしがってる。
まあ幼馴染が勘違い男だと恥ずかしいよな、うん。つくづく迷惑を掛けてるな。

「……では、私はさきに部屋に戻る」

いや、そこは待とうぜ、幼馴染。
いくら俺と一緒に歩くのが恥ずかしくても今の俺は怪我人なんだから優しくしてくれ。

「……。一夏」

「どうした？」

「その、だな。戦っているお前は……か、かか、かっ」

ドドン！太鼓を叩くドン！ってか？

「格好良か……な、なんでもない！」

なんでもないならいいんだけどさ。

格好良かった……ねぇ。嬉しいこと言ってくれるじゃんか。

「で、ではな！」

自分の発言を恥じてか、逃げるように保健室を去っていった。

ああ、少しの幸福感と眠気が一気に襲い掛かって来て、俺はニヤケそうになる顔を我慢しながら眠りに着いた。

「……一夏」

「……」

こいつはなにやってんだ。

人の気配がすると思って起きてみたら、めちゃめちゃ近いところで鈴の声が聞こえたぞ。

パチッ

目を開いて確認すれば鈴の顔は鼻先3センチの位置に。しかも目を瞑ってる。
ますますなにがやりたいのかわからんぜよ。

「おい」

「ッ！？」

「なにやってんだよ、お前は」

「おっ、おっ、おっ、起きてたの！？」

「そりゃあ顔にお前の息が当たってりゃイヤでも起きるわ」

そう言うと鈴は顔を真っ赤にして怒りながら口を手で抑えた。
イヤでもは余計だったか。もっと言葉の選出はしっかりとしないとな。

「なぁ鈴」

「な、なによ」

「あれってやっぱり俺の勘違いか？なんども考え直してみたんだけどさ、やっぱりあれってどう考えてもプロ――」

「ふ、深読みよ！そんなこと絶対ないから！うん、ないない！」

そこまで言われると俺も哀しくなるんだが。
まあそうやって拒否されるなら違うんだろうし、この話もしたくな

いだろう。

「こっちに帰って来たってことはまたお店やるのか？開いたら言ってくれよ。俺が開店一号のお客さんになるから」

「あ……その、お店は……しないんだ」

「なんで？」

「あたしの両親、離婚しちゃったから……」

……ああ、やっとつながった。

転校初日のあの表情は、そういうことだったのか。

「あたしが国に帰る事になったのも、そのせいなんだよね」

「……そうか」

「一応母さんの方の親権なのよ。ほら、今って何処でも女の方が立場上だし、待遇も良いしね、だから……」

ぱっと明るくなったかと思えば、またトーンを沈めて喋り出す。

「父さんとは一年会ってないの。たぶん、元気だとは思うけど……」

俺はこいつになんて声を掛けてやればいいんだろうか。

元気出せ、か？なんで離婚したんだ、か？大丈夫、か？

どれも違うだろ。

「家族って、難しいよね」

俺にはわからない。
前世でも施設で育ち、今でも姉ちゃんだけが家族の俺には。

「……」

「――――え？」

なにをすればいいかわからず、俺はただ哀しい表情をする鈴を抱き寄せた。
体が軋んで痛みが全身に走るけど、今一番辛いのは鈴なんだ。
そんなこと構ってられるかよ。

「な、な、な……！」

「そういうのはよくわかんねぇけどさ、俺には。お前が辛いってことくらいならわかる。お前がどうかは知らないけど、俺はお前に傍にいてほしいぞ」

「そ、それって――」

バーンっ！

「一夏さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て――あら？」

ずかずかと保健室に入ってきたセシリアが止まる。足が、言葉が、全てが。

「どうしてそんなに顔を紅くしていらっしゃいますの？」

セシリアが入ってきた瞬間、鈴はビックリして俺の腕から離れたんだが、そんなに恥ずかしかったのか顔を紅くして俯いたままだ。それを見て不思議に思うのは当然だろう。

「べべ、別に！？な、な、なんでもないから！」

こいつはなんでこんなにキョドってるんだ？
抱きつくことなんて転校初日もしただろうが。
昔なんか自分からよく抱きついて来たくせに、何を今更恥ずかしがってんだよ。

「そうですか。それではなぜ二組のあなたがここにいるんですか？一夏さんは一組。二組の方にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「な、何言ってんの？あたしは幼馴染だから良いに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

別に何組だろうがお見舞いしてくれるんだったらそれでいいだろ。
俺は嬉しいぞ、お見舞いに来てくれるのは。

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！それに、今は一夏さんの特別コーチでしてよ！ついでに代表候補生ですから」

「じゃあ明日からはあたしが特別コーチになってあげる。代表候補生だし」

セシリア、自分で自分の墓穴を掘るなよ。

「そ、そんなのダメですわ！」

「なんで？いいじゃん。一夏もそれでいいでしょ？」
「だ、ダメですわよね！？一夏さん！」
なんでいつも大事なことを俺に振るかな。
こっちの身にもなってもらいたいものだ。
「間を取って箒で――っていうのは嘘で、優しくしてくれるならどっちでも大歓迎だ」
無言の圧力で封殺されたので、結局無難な回答になった。
正直言うと教えてくれるならどっちでもいいんだけどな。
「それならあたしね。昔から一夏には優しい方だから」
おおう、マジでか。
俺は映画のチケットを有料で掴まされることが優しさだと初めて知ったぜ。
「あら、それならわたくしの出番ですわね。ささ、それでは早速今日の戦闘の分析をはじめましょう。わたくしとふたりで」
「なに勝手なこと言ってるのよ。一夏はあたしと組んで戦ったんだから、あたしと分析するに決まってるじゃない。バカなの？」
「ば……！？フン、これだから品の無い方は困りますわ」
「気取ってるばっかりのヤツよりマシよ」

「なんですって！？」

「なによ！？」

どっちもどっちだろうが。

いいから怪我人の傍で大声出すな。体に響くんだよ。

「……はぁ」

「遅い！」

帰って来たらいきなりこれだ。

ったく、ここの女子は怪我人を怪我人として扱うことが出来ないのかよ。

「なにをしていたのだ、まったく……。私は空腹を我慢して待っていたのだぞ？」

「いや、先に食ってろよ」

「無粋な奴め。待っていたと言っているだろう」

そりゃあ帰っていきなり怒鳴ってくるくらいなら食ってれば良いのにと思うのが普通だろ。

まあ待っててくれたことは嬉しいけどさ。

「じゃあ食堂行くぞ。俺も腹減ったし」

「ま、待て！」

何故止める。
もしかして先にシャワー浴びた方がいいのか？
確かにそうした方が良いとは思うけど、お腹がぺこちゃんなんだよね。

「きょ、今日は、その、だな。ええと……」

ああ、この空腹をそそられる様な匂いが更に俺を空腹へといざなう……ん？

「部屋の中から良い匂いがするんだけど」

「……普段はしないのか？」

「勘違いするな。飯の匂いだバカ野郎。お前は普段から良い匂いだよ」

女子なのに良い匂いしない方がおかしいだろ。なに言ってんだ、こいつは。
俺は汗のにおいも嫌いじゃないぞ。

「あっ、チャーハン。チャーハンだ！チャーハンじゃないか！チャーハンだよ！」

チャーハンの変格活用、これ常識だから。

依然と命令はないからよろしく。

「わ、私がだな……。つ、作った」

「ホントに？俺のために？」

「そ、そういうわけではない」

「そうかそうか。ありがとな」

「ち、違うと言っているだろう！」

違うならもう違うでいいよ。

ご飯作って待っててくれて、それを自分のためだと言っても説得力ないだろうが。

とりあえず俺は手洗いうがいをして、席に着いた。

「いただきます」

「うむ、遠慮なく食べればいい」

やっぱり俺のために作ってくれたんじゃねェか。

普通に嬉しいぞ。

嬉しいんだが……うん、あれだ。これはなんだ？チャーハンだと思ったんだがなぁ……違ったらしい。

「……」

「どうだ？うまいだろう」

俺はどうすればいいんだ？
やはりありのままを伝えるべきか。
「あれだな。薄味……というか味がない」
「な、なに！？貸してみろ！」
箒は俺の手からレンゲを取り、ぱくりと一口。
あっ、間接キス。
まあそのくらいで騒ぐほど初心ではないからどうでもいいが。
「……味がしない」
「だろ？俺は一瞬箒が魔法使いになったかと思ったぜ」
「こ、これは、たまたま……そう！たまたま忘れたのだ！」
「そうか。それは悪かった。たまたまなら仕方ないな。ほら、レンゲ返せよ。食べるから」
「いや、しかし、だな……」
「なんだ？お前が食べさせてくれるのか？」
そういうと箒は顔を真っ赤にした。
ごめん、今のはダメだね。からかった俺が悪かった。
だからそんなに怒らないでくれ。
「ど、どうしてそうなるのだ！」

「だってお前が言ってたんだろ？あーんしてもらったらもっと美味しくなるって」

俺ってすげー。記憶力抜群だな。

たまに俺って天才じゃないかと思う時があるが、こりゃあ本物だな。

悪い意味で。

「そ、それもそう……だな。よし、口を開けろ」

そこから俺のペースなんてお構いなしに味なしチャーハンが口の中に放り込まれた。

少し甘酸っぱくなってた気がするのは……うん、気のせいだろ。

「ごちそうさま」

「か、勘違いをするな！」

主語がないとなにを勘違いしてるかすらもわからねぇよ。

「今日は、その……偶然、まれに、低確率で、失敗しただけだ。いつもは成功する」

「そうかい」

「信じてないだろ！」

「今度ちゃんと成功した料理を食べさせてくれたら信じてやるよ」

「……また作ってほしいのか？」

「箒がいいなら作ってくれよ、美味い料理」

「……ま、毎日でも食べたいか？」

なんだ、急に縮こまって。

……あれか。今回は鈴のお陰で学習したからもう勘違いをしませんことよ！

これはプロポーズではない！ヘルパーの求人であると！

しかしそれならもう鈴が約束してくれたしな。

うーん、どうなんだろうか。

「そうだな。お前――」

「あのー、篠ノ之さんと織斑くんいますかー？」

いますよー、と返事をするまでもなく、声の主である山田先生は部屋の中にカツカツと入ってきた。

「どうしたんですか？」

「あ、はい。お引っ越しです」

ふむ、つまり山田先生もこの部屋に住む、ということかね？

荷物もなくやってくるなんて、フットワークが軽いなんてもんじゃないな。

「……先生、主語を入れて喋ってください」

「は、はいっ。すみませんっ」

箒はなんでこんなに機嫌が悪いんだ？
さっきまで結構上機嫌だったと思うんだけどなぁ。
もしかして先生のこと嫌いなのか？
それは感心できないぞ、箒。

「えっと、お引っ越しするのは篠ノ之さんです。部屋の調整がついたので、今日から同居しなくてすみますよ」

へぇ、よかったじゃないか、箒。

「えっと、それじゃあ私も手伝いますから、すぐにやっちゃいましょう」

「ま、ま、待ってください。それは、今すぐでないといけませんか？」

まあ今日は疲れてるだろうし、ゆっくり休みたいよな。
引っ越しって結構疲れるから。

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのは問題がありますし、篠ノ之さんもくつろげないでしょう？」

「い、いや、私は――」

そこでなんで俺を見るんだ、箒。
もしかして――

「俺と違う部屋になるのがイヤなのか？なーんて、バカなことがあるわけもないか。ハッハッハ……」

カチンっ
あれ？おかしいなぁ。
冗談っぽく笑ったんだが、冗談に聞こえなかったんだろうか。

「先生！今直ぐ部屋を移動します！」

「は、はいっ！じゃあ始めましょう！」

「俺も手伝った方がいいか？」

「いらん！
（まったく、やっと私の気持ちを理解したと思ったら、あんなことを冗談で言うとは！なんなんだ……。私がこうまで気にかけているというのに、一夏というヤツは……）」

なんでこんなに怒ってるんだ。
冗談が通じないのか、こいつには。
その怒りも手伝ってか、引っ越しは一時間と掛からずに終わった。

「いなくなって見ると寂しいもんだな……」

箒がいなくなって広くなった様に錯覚する部屋を眺めてぼやいてみた。
なんだかんだであいつにはお世話になることが多いからな。
それに1人だと話し相手がいないからつまらないんだよねぇ。

「……あー……寝よう」

もう寝る前の行動は全て済ませた。

いつもならここで箒と談笑なり――談笑になってるかどうかは不明――をするんだが、1人だとすることもなく、寝る事しかない。
もっと多種多様な趣味を持っておけばよかった……と思うが必要最低限の荷物しかないから関係ないか。

コンコン

もう布団に入ったのでキツネさんは入って来れません。残念でした。

ドンドンっ！

……くそっ、誰だよ、こんな夜中に訪問してくるヤツは。キツネの次はたぬきですか？う『どん』繋がりで。
まあ思い当たるヤツは1人しかいないけどさ。

「山」

ガンッ！

川って答えたら開けたのに、ドア殴るなよ。

「はいはい、どうしたんだよ」

仕方なくドアを開けてみると、そこにはやっぱり箒が立っていた。
やっぱりまだ怒ってる。だから開けたくなかったんだ。
これが箒に化けたたぬきだったらと切に願う。

「……」

喋らないあたり、やはり人語を持たぬたぬき――ではないようだ。

こんな眼光で睨んでくるたぬきがいたら、今頃たぬき政権だ。

「こんなところじゃあれだし、部屋に入るか？」

「いや、ここでいい」

「そうか」

「そうだ」

……会話を続ける気はないのか。

「そうか」に「そうだ」って返されて俺はなんて返せばいいんだ？

コーラか？

キッ

はいはい、面白くなかったね。

ちょくちょく心を読まれると疲れるんだけどなぁ。

おちおち親父ギャグも考えられないぜ。

「それで、用があるから来たんだろ？出来れば早く済ませて頂きたい」

「う、うむ。来月の学年別個人トーナメントだが……」

六月の末にあるらしいな。

参加は個人の自由でクラス対抗戦のように賞品はないらしいから、

あんまり参加する人はいなさそうだけど。

学年別ってだけで制限はないらしいけど、結局専用機持ちに有利な

大会だよな。

「わ、私が優勝したら――」

したら？

『この戦いが終わったら、俺、結婚するんだ……』みたいな死亡フラグ立てる気か？

「つ、付き合ってもらう！」

ピシッっと指を突き付けられた。

だから人に指をさすなと教わらなかったのか、幼馴染2人は。

しかし……付き合う？

これってもしかしなくても『告白』だよな。

確実に死亡フラグ立ったよ、箒さん。俺はお前に死んでほしくないんだが。

「お、おう……」

箒の勢いに圧されて、ついつい死亡フラグを回収してしまった。

これは俺が箒のためにフラグをバッキバキに――つまり優勝せねばならなくなったということだ。

任せろ箒！お前の命は俺が守る！

第１２話（前書き）

蘭がかわいく書けないなぁ

第１２話

「で？」

「なにが『で？』なんだよ」

「だから女の園の話だよ。良い思いしてんだろ？」

格ゲーの最中に話振ってんじゃねェよ、五反田。
こっちは超絶雑魚キャラで勝負してやってんだぞ、おい。

「してないっつの。お前も来てみればわかるがあそこは地獄だ」

「嘘を吐くな嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねェか。
なにそのヘヴン。招待券ねえの？」

だからヘルだって言ってんだろ。
あそこが天国だったらＩＳ学園の外はなんなんだよ。極楽浄土越えてるよ。

「ああ、そう言えば鈴が来てくれてマジで助かったぜ。話すヤツが少なかったからな」

話し掛けられることはあるにしても、鈴とか箒みたいな仲良いヤツはあんまりいないからな。

「ああ、鈴か。鈴ねえ……」

ニヤニヤしながら俺の方見んな、気色悪い。
申し訳ありませんが一夏さんにそんな御趣味はなくってよ――っと。
「お前弱過ぎ。どんだけ手加減してると思ってんの？イギリスのメイルシュトロームにイタリアのテンペスタで負けるってどうなんだよ」
「いや、お前が強すぎんだろ。技弱くてコンボ微妙なキャラでそこまで戦えるとかすごい通り越して頭おかしいレベルだぞ」
「愛があればラブイズオーケーっていう言葉を知らないのか、お前は」
因みにやってる格ゲーってのはＩＳのゲームな。
データには第２回のモンド・グロッソのものが使われてるが、姉ちゃんのデータは諸事情により入っていない。
入っていれば俺は愛用する。確実に。
「で、話は戻るが、鈴のことは――」
「お兄！さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！さっさと食べに――」
鈴の話に戻そうとしたところを、バンッと大きな音を立てて妹の五反田蘭がカットイン。
兄貴と違って有名私立に通う優等生。
兄弟でここまで差が開くってすげぇな。いや、俺もだけど。箒のところもか。
「おー、久し振り。元気だったか？」

「いっ、一夏……さん！？」

何処に行っても女子って家とか部屋の中じゃラフな格好してるんだね。

女子寮とか怖いよ、もう。夜とか部屋から出れないもん。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？全寮制の学園に通ってるって聞いてましたけど……」

「今日は家の様子を見に出て来たんだよ。ここにはその序でに寄っただけ」

「そ、そうですか……」

いっつも思うが、俺と話す時はなんでこう敬語なんだろうな。

兄と話す時のように親しくしてくれてほしいのだが。個人的には。

「蘭、お前なあ、ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――」

ギンッ！

おお、箒にも勝るとも劣らない良い眼光だ。

その眼光が俺に向けられることが無いように注意せねば。

「……なんで、言わないのよ……」

「い、いや、言ってなかったか？そうか、そりゃ悪かった。ハハハ……」

相変わらず妹に弱いんだな、五反田は。
姉と妹という違いはあれど、なんか境遇が似ていて哀しくなってくる。

「あ、あの、よかったら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「良いのか？俺なんかがお邪魔して」

「あ、はい。一夏さんなら……」

「おー。じゃあいただくよ。ありがとな」

ぱたんと、入って来た時とはまるで違う音を立ててドアは閉まった。
行くはよいよい帰りはこわいってヤツか。

「蘭ちゃんってさ、俺のこと嫌ってる？もっと親しくして欲しいんだけど、俺的には」

出来れば兄の様なポジションとして。

「は？」

は？ってなんだよ、は？って。
そんなとぼけた様な顔しても一夏さんにはわかっているのですよ！

「だって余所余所しくないか？なんか俺とはあんまり目合わせてくれないし、今だってすぐに部屋から出て行ったし」

やっぱり蘭ちゃんという呼び方がいけないのか。

年下の女の子を呼び捨てにするとか俺には無理だ。だからちゃん付け。
でも昔『ま、まあ、いいですけど……』と承諾してくれた気がするのだが、やっぱり気を遣わせていたのか。

「いやーなんというかお前はわざとやっているのかと思う時があるぜ」

「は？いや、答えになってねェだろ、そりゃ」

「まあ、わからなければいいんだ。俺もこんな歳の近い弟はいらん」
なんで弟が出てくるんだよ。
それに俺だって五反田みたいな兄貴はいらねェから。

「まあいいや。とりあえず飯食ってから街にでも出るか」

「それもそうだな。昼飯サンキュ」

「なあに気にするな。どうせ売れ残った定食だろう」

……あの甘いカボチャ煮の定食か。
美味しいんだけどな。甘過ぎてご飯に合うかと問われれば否だけど。
まあタダめしを食わせてもらってる身分なので感謝はしてるが。

「うげ」

食堂に着くなり弾が露骨に嫌な声を出して立ち止った。
通行の邪魔になるのでそういうのはやめてください。

おまえはいつぞやの鈴ですか。

「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄ひとりで外で食べてもいいよ」

「聞いたか一夏。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきちまうぜ」

ああ、そうだな。

俺ももし妹がいてそんなこと言われたら号泣してるぜ。

因みにこいつが立ち止ったのは先客で蘭ちゃんがいたから。

「別に3人で食べれば問題ないだろうが。いいからどけよ。進めねェだろうが」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「へいへい……」

こうして無事着席出来たわけなんだが――

「なぁ蘭ちゃん」

「は、はひっ？」

「どっか出掛けるのか？おしゃれして」

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

俺はさっきまでのラフな格好も好きだったんだが、今は半そでのワンピース。それに黒のニーソ。

まあどっちにしてもかわいいよ。
しかし余所余所しい態度を取られているので口には出さない。
「特に予定もないのにおしゃれすんの？やっぱ女の子だね。男子とはちげーわ」
家でおしゃれとか普通に考えられないだろ、男子は。
何処にもいかないのに部屋の中で『キラッ☆』とかやってキメてる男子いたら引くわ。
「あっ、その、それは……」
「それじゃあさ、後でどっか出掛ける？」
「ほ、ホントですか！？」
「ああ、弾と蘭ちゃんの3人で」
ガクッ
なんでか知らないけど蘭ちゃんが肩を落とした。
せっかくおしゃれしたなら出掛けないと損だろうと思ったんだが……違うのかね。
女子にとっておしゃれは損得じゃないってことか？奥が深くて俺にはわからん。
「えーっと……じゃあ2人で行く？」
「ほ、ホントですか！？」

「ああ。俺の用事っていうのもそれほどでもないし、兄妹水入らずで」

ガクッ

ありゃ、これも違ったのか。
これは2人の親睦を深める絶好のチャンスだと思ったんだけどなぁ。
弾もいつまでも尻に敷かれているのもイヤだろうし、お節介だっただろうか。

「じゃあ――」

「もういいです……」

「……そうか。俺と2人で出掛けるのはどうかな、と思ったんだけど、そう言うなら仕方ないか」

「い、いえ、そんなことないですよっ？是非っ！是非行かせてください！」

おおう、急に目を輝かせて手を取って顔を近づけて来たぞ。
なるほど、これが正解だったのか。
それにしても急にこんなに親しくしてくれるとは思わなかったぜ。

「いやぁ、俺も蘭ちゃんとは仲良くなりたいと思ってたんだよ。ま、その話はまたあとで。今は飯食おうぜ」

なんか後ろから強烈な視線が刺さってくるんだよね。
その主は言わずもがな、厳さんなんだが。

「あっ、はい。いただきますっ」
「いただきます」
「いただきます……」
蘭ちゃんは上機嫌で、俺は普通に、弾は存在を忘れられていたからか寂しげに合掌した。
「でよう、一夏。鈴と、えーと、誰だっけ？ファースト幼馴染？と再会したって？」
「ああ、箒な」
「ホウキ……？誰ですか？」
「ファースト幼馴染だよ、俺の」
「因みにセカンドは鈴な」
「ああ、あの……」
蘭ちゃんは鈴の話になるとなんか表情が硬くなるんだよね。
別にそんなに意識する相手でも無いと思うんだけど。
「そう言えばさ、その箒と同じ部屋だったんだよ。流石に今は――」
がたたっ！
「お、同じ部屋！？」

こら、厳さんが自分に甘いからって椅子を倒しちゃいかんぜよ。
俺と弾が倒したら高速のオタマが飛んでくるんだから。
まあ俺はそれを打ち返して、厳さんもそれを打ち返して……のラリーが続いた後最後は弾に当たるから犠牲になるのは毎回弾だけ。これ常識。

「い、一夏、さん？同じ部屋っていうのは、つまり、寝食を共に……？」

なんか前にも同じようなフレーズ聞いたな。
あれは鈴だっけ？
こいつら自棄に古い言い回しするね。

「そうだな。まあそれも先月までの話で、今は別々の部屋になったよ。当り前だけど」

「い、一ヶ月半以上同せ――同居していたんですか？」

「ああ、そうなるな」

そう言えば入学前は一週間、相部屋になってからは一ヶ月って言われてたのに随分長い間同居してたな。

「……お兄。後で話し合いましょう……」

「お、お前このあと一夏と出掛けるんだろ？ハハハ……」

「では夜に」

うん、兄妹の間でのコミュニケーションは重要だぞ。
仲睦まじいことはよい事だ。

「……決めました。私、ＩＳ学園を受験します！」

がたたっ

「お前なに言って――」

ビュン――――――ガッ

例によって弾は犠牲になったのだ。
まあそれはどうでもいいか。

「なんでそうなるんだ？蘭ちゃんのところって大学までエスカレーターだろ？もったいないだろ」

俺がそんな状況だったら間違いなくそんなことはしない。
エスカレーターって面接だけで進学できるからあんまり勉強しなくていいからな。
かく言う俺もＩＳを起動させただけで自動的に入学させられたが。

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

すごい自信だな。そういうの俺も欲しいわ。

「ＩＳ学園は推薦ないぞ……」

ふらふらだけど、こいつは大丈夫なのか？
まあ大丈夫なんだろうな、いつものことだし。

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「いや、でも……な、なあ一夏！あそこって実技あるよな！？」

「そうだな。それがなかったら俺は今頃藍越学園だ。因みにＩＳ稼働試験って言ってな、適性がまったくないやつはそれで落とされるらしい」

ああ、今日もカボチャ煮は甘いな。

「……」

「げえっ！？」

どうしたどうした。

無言で取り出された紙にはなんて書いてあったんだ？

「ＩＳ簡易適性試験……判定Ａ……」

「問題はすでに解決済みです」

それは良いんだけどさ、なんでそれを持ち歩いてるんだ。

俺はそこが気になった気になってしょうがないんだけど。

「で、ですので。い、一夏さんには是非先輩としてご指導を……」

「俺が教えられることならいいぜ。手取り足取りなんでも任せなさい」

「や、約束しましたよ！？絶対、絶対ですからね！」

「おう、絶対だ」

少し自分が先輩風を吹かせながら教える風景を思い浮かべてみたけど……似合わなかった。
普通に普通のことを教えよう。
それから弾がものすごい勢いで反論を投じていたが、厳さんと母親の蓮さんにバッサリと切り捨てられていた。

「さて、と。じゃあ行くか、蘭ちゃん」

「え？ど、何処にですか？」

「さっき言わなかったか？せっかくかわいくおしゃれしたんだし、俺と2人で出掛けようって」

あっ、かわいくって言っちゃった。

「あ、いや、か、かわいい……ですか？」

「んー……ああ、かわいいよ。それじゃあ弾、悪いけど蘭ちゃん借りて行くわ」

「もってけ泥棒！このモテスリムが！」

なんでこいつはキレてんだよ。
しかもモテてないし、スリムってほど筋肉なくないぞ。
だから俺にモテスリム要素は0だ。

「なんていうか、あれだな。恥ずかしいな……」

「そ、そう、ですね……」

早速街に出て来たんだが、恥ずかし過ぎる。
なにが恥ずかしいって俺の格好。
友達の家に遊びに行くラフな格好――ジーンズに白のポロ――で、隣にかわいくおしゃれした子がいるんだから、そりゃあ恥ずかしいことこの上ない。
これは一種の公開処刑だな。なんで俺はこんなことを言いだしたのか。
３０分前の俺、恨むぜ。
お陰さまで周囲の視線浴びまくりですわ。

「何処行こうか」

「わ、私は一夏さんと一緒ならどこでも……」

そう言われてもな。
友達の妹ってどういうところに連れて行けばいいんだ？
っていうか友達の妹と2人で出掛けるってなにかおかしいだろ、既に。

「静かなところがいいかな、俺は」

「え……？」

「あ、イヤだった？俺と蘭ちゃんってあんまりゆっくり話したことないじゃん？だからゆっくり話せる場所が良いかなって思ったんだけど……ダメか？」

「そ、そんなことないですよっ！？じゃ、じゃあ公園とかどうですか？」

「ああ、そうしようか」

なんていうか今日は自棄に人が多いな。
これではぐれたら大変だ。
離れない様に手でも握っとくか。

ギュっ

「（手……てええええ！？手、手、手！あぁぁぁ……手……握られてる……。手、汗とかかいてないかな？かいてないよね？お、おっきいな、一夏さんの手……。このまま2人で何処か遠いところに行けない……かな？）」

「おい、大丈夫か？蘭ちゃん？」

「は、はひっ！？」

もう公園に着いたんだけど、なんか蘭ちゃんの様子がおかしいぞ。
手を握ったのは流石に失礼だったかな。

「ほら、こっち座りな」

「あっ、はい……
（手、離れちゃったな……）」

「手がどうかしたのか？そんなに見つめて。やっぱイヤだった？」

「い、いえ！そんなことは、ぜんぜんっ！」
……やっぱりなんか気を遣われてるよなぁ。
兄の友達と公園で2人きりなんて状況、そりゃあ気を遣うわ。
俺はもっと他人の気持ちをちゃんと理解出来る様に努めないとな。
鈴のとき然り。

「……」

「……」

まずい。これは非常に由々しき事態だ。
互いに無言のまま時だけが流れて行くという最悪の。
なにがいけないのか？それは恐らく距離。物理的な。
同じベンチに座っているんだが、少し遠いんだよ。
それが今の俺と蘭ちゃんの心の距離でもあるわけだ。
以上、俺の不思議な解説終わり。
そういうことで物は試し、試行してみよう。

「あのさ」

「な、なんですか！？」

そんなに過剰なまでの反応は示してくれなくて良いだけど。

「もう少しそっち行っていいか？」

「へ？」

「いや、イヤならいいんだ。なんかこう、離れてると話しにくいだろ？」

なんか意識すると中途半端な距離にいると話しにくいよね。俺だけかもしれんが。

「そ、そう、ですね。わ、私がそっちに行きますね」

ピトっ

蘭ちゃんはそう言って俺の体に体を寄せて来た。
これは近過ぎると思うんだけど、まあいいか。

「そう言えばさ、蘭ちゃんって彼氏とかいるの？」

話す話題が無い時はこれ！
女子中生・女子高生あたりはこんな話大好きだから、って誰かから聞いた気がする。

「か、彼氏ですか？い、いませんけど……どうかしたんですか？
（『その彼氏に俺が立候補しても良いかい？』
『あっ、それは……』
『大丈夫。安心して。キミの手はずっと離さない』
『は、はい……』
……冷静に。冷静に振る舞わないと！）」

1人で顔赤くしてどうしたんだろうか？

「そうなんだ。言い寄ってくる男子とかいっぱいいそうだけどな」

「そ、そんなことは……」

「最近の男子中学生はわからんな」

「なにがですか？」

「ほら、蘭ちゃんかわいいのに、男が寄って来ないのはおかしいだろ」

妹的なポジションでかわいたがりたい、俺は。
良い子だし、気が効くし、優しいし、良いお嫁さんになりそうだと俺は思うぞ。

「そ、そう、ですか？」

「うん。少なくとも俺は好きだよ――――あ。ごめん。俺用事思い出した。この埋め合わせはまた今度するから、今日はもう解散でいいか？」

「……」

「おーい」

困った。非常に困った。
赤面して蘭ちゃんが動かなくなったんだけど、これはどうすればいいだろう。
誰がブレイクなんてかけたんだよ。
俺はストナも金の針も持ってないぞ。術者出てこいや！

「蘭ちゃん？」

「……」

仕方がないか。

用事はあるんだけど、まあ蘭ちゃんを送ってからでも間に合わせられる筈だ。

ということで石化した蘭ちゃんをおんぶして、俺は五反田家へと走った。

「弾！」

「どうした？もう帰って――――なにやってんだ？」

「いや、それがかくかくしかじかで……」

「……蘭がこうなった理由を教えてやろうか？」

「おう、頼む。簡潔にな」

「お前のせいだ」

……はて、俺はなにかやらかしたのか。

思い当たる節はあるっちゃあるけど……どうなんだろう。

『友達の妹として優しかったり気遣いが出来るのはとっても素敵だと思う。そういうのは人として好きだよ。好感が持てる』ということくらいだ。

「あー……じゃあ蘭ちゃんの番号教えてくれ。なんか俺の声届いてないし、気付いたら家にいたっていうのも不思議に思うだろ。弾にわざわざ説明させる訳にもいかないしな」

「これがモテスリムたる所以か……」

それは勝手にお前が言ってるだけで、俺は別にそんなんじゃないんだが。

「じゃあ後でメールででも送ってくれ。じゃあな」

よし、用事を済ませに行かないとな、用事を！

「……お兄」

「どうした？」

「す、す、す、好き……って。えへ、えへへへへ。かわいい、って。えへへへへ……。電話……いつ掛かってくるかな……えへ。えへへへへへ……」

「（ぶ、不気味すぎる……！あのモテスリムにかかればあの蘭が俺にべったりするのか……。モテスリム……末恐ろしいヤツだ）」

えっくし。

なんか変な噂されてる気がするけど、まあ気のせいだろ。

第１３話

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

姉ちゃんが教室に入って来て、騒がしかった教室が静まり返る。
まあそれはいいんだけど、昨日出しといた夏物のスーツ来てくれてるな。
昨日の用事って言うのはそれで、クリーニング出したまま忘れてたんだよ。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のの物を使うので忘れない様にな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

いや、構うだろ。
男がいる前で下着姿なんてはしたなさ過ぎるからな。
学校指定の水着も旧スク水だもんな。体操服も確かブルマだったか。
正直何がやりたいのかさっぱりわからん。そういうのは温故知新とは言わないのだよ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ。ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！

しかも二名です！」

『えええええ！？』

転校生の紹介よりも女子の悲鳴染みた歓声にビックリした。
それにしても、なんでうちのクラスに2人も来るんだ。分散させろよ。
他のクラスにも各二名ずつ配備されてるのか？

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた2人の転校性を見てどよめき立っていたクラスの空気が固まった。
まあ俺も驚いたよ。転校生の1人が男なんだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

なんていうか、女の子みたいな顔してるね、失礼だけど。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

ああ、俺はここで予感した。
これは耳を塞いだ方が得策だろうと。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああ――――っ！」

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった～～～」

俺の予想通り、耳を塞いでいてもつんざくような悲鳴の数々。
正直男の俺にはこのテンションがわからん。
確かに男子が増えたことは嬉しいけど、そこまで騒ぐほどのことじゃ――とか言ったら怒られそうだからやめよう。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

山田先生の言葉を聞いて、見た目からしてかなり異端だと思われる女生徒に俺は目を向ける。
なんというか――――見惚れてしまった。
なにがそうさせるかって、流れる様な綺麗な銀髪だ。
銀に髪を染めようと思ったらマニキュアを使わなくちゃいけなくて、てかてかの気持ち悪いヤツになるんだけど、この銀髪はそうではない。

自然な、透き通る様な、銀。
しかも左目に眼帯をして、右目は灼眼というのだから、ミステリアスな雰囲気が立ちこめている。
邪気眼なんだろうか。

「……」

その本人は口を開かず、ただ姉ちゃんの方を見つめている。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

このやり取りで理解した。ああ、ドイツの軍人なのだろうな、と。
不覚にも俺の油断で誘拐されてしまい、それを救出するために姉ちゃんはモンド・グロッソの決勝戦を放棄して俺を救出に。
その時手助けをしてくれたのがドイツ軍で、その謝礼も兼ねてのドイツ軍で教官をやったらしい。
姉ちゃんにはなんでもかんでも黙ってやるのはやめてほしい。
弟として支えられるなら本望なんだから。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

「あ、あの……以上、ですか？」

「以上だ」

いや、もうちょっと挨拶しようぜ。
空気にいたたまれなくなった山田先生が泣きそうじゃないか。
……あっ、目があった。

「！貴様が――――」

つかつかと近付いて来るラウラ。
その顔は俺と親しくなろうというものではなく、俺に害意のあるもの。
これはなにか起こりそうだと思い、とりあえず手を机の上におき、ラウラの目だけを見つめる。

パシッ！

「……」

パシッ！

ビンタをされそうになったから2発とも掴んでやった。
ラウラは文字通り一瞬目を丸くするが、すぐに俺の方を睨んできた。
普通この状況で睨むのは俺の方なんだがなぁ。
しかしあれだ。クロスするようにして腕を掴んだんだが、これからフォークダンスでも踊ろうって言うのか？
そりゃあ名案だ。俺の脳内ではマイムマイムが流れてるぜ。

「穏やかじゃねェなぁ。いきなりなにすんだ」

「くっ……！」

ラウラは腕を振り払おうとするが、軍人だろうが女相手に負けるほど腕力は弱くないので手はブラブラとするだけ。
おお、これは本格的にフォークダンスだ。親睦を深めたいんだな？

「落ちつけ――――よっ！」

危ないなぁ、もう。
両手が塞がれたら今度は頭を目掛けて蹴りかよ。
頭を低くして避けたからいいものの、当たってたら気絶してるぞ。
しかもスカートだからその下も見えたし、女の子なんだからそういうことにも気を回そうぜ。

「ああ！もううぜぇな！」

今度はさっきと同じ足での回し蹴り。
それは右手を放して右手で受けて、その後右手でラウラの頭を掴んで机に叩きつけ、素早く椅子から立って背後に回ってようやく捕縛完了。
俺を過小評価するからこうやって軍人なのに一般人に捕まるんだよ。
過大評価されるほど強くもないけどな。

「……はぁ。なにがやりたいんだよ」

まあラウラが俺に攻撃的になるのは姉ちゃんに汚点を残したってところだろうな。
それでも俺が姉ちゃんに殴られる筋合いはあっても、俺がラウラに殴られる筋合いはねェよ。

「……」

「言っとくがこの状況からじゃお前はどうやっても抜け出せねェからな」

そう思ってたが、軍事を舐めていた。
勢い良く振り上げた両足が俺の頬を掠め、力が弱まった瞬間反動で宙を舞って机の上に着地。
見事過ぎる脱出劇。でもまたパンツ見えたぞ。

「まだやる気かよ……」

そこから今度は本気の回し蹴り。
さっきとは違う、確実に俺を殺しに来るようなものだ。
まあそれもしゃがんでよけて、またパンツが見えたんですけど。
っていうか姉ちゃん早く止めろよ。俺が死んでもいいのか。
クラスのみんなはなにが起こってるかまったくわかってないぞ。
当人の俺ですらなんでこんなことになってるか未だに把握できんからな。

「ラウラ、そこまでだ」

こういうのを鶴の一声というんだろう。
俺が目で助けを求めたら、やれやれと言った様子で言葉一つで暴れ馬を制御した。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

別にお前が認めようが認めまいが姉ちゃんは俺のただ1人の家族だ

っつの。
っていうか俺優勢だったじゃん。それでそんなことを言われる筋合いはないと思うんだが、どうだろう？

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人は直ぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

まあこのことは忘れよう。憶えておく必要もないしな。
それより移動が先だ。このままでは女子と一緒に着替えなくてはいけなくなる。

「おい織斑、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

ああ、そうだったな。

「キミが織斑くん？初めまして。僕は———」

「あー……挨拶はあとだ。取り敢えず来い。ここにいても女子が勝手に着替え出すだけだから」

説明すると同時にシャルルの手を取って教室から出て行く。
早くしないと他のクラスの女子が追い掛けてくるかもしれないし、走るか。

「男子は空いてるアリーナの更衣室で着替えだから。実習の度に移動して面倒だとは思うけど、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんだなんだ？
さっきとは打って変わって落ちつかなさそうだな。
「どうした？」
「あ、うん、その……」
シャルルの目線を追って見ると、そこには握られた手。
ああ、男同士手を繋ぐ――こういう言い方をすると気持ち悪いな――のに抵抗があるのか。
俺は咄嗟に引いただけだから意識はしなかったけど。
「手離した方がいいか？」
「え？ううん！そんなことは……」
「変なヤツ」
「ええ！？」
いや、変だろう。
手を離した方がいいかって聞かれてそのままでっていう男子は相当変だと思うぞ。少なくとも俺は。
「でも助かったよ」
「なにが？」
なんで少し怒ってるんだ？
男子同士多少の罵倒は普通にするぞ。バカとか。

「学園に男子1人だけってのは辛いだろ。もう1人いるだけでかなり心強いぜ」

「そうなの？」

……なんでこんなに会話が噛み合わない様な感じなんだろうか。
普通に男子1人は気を遣うからイヤだろ。
やっぱこいつ変だ。絶対。感覚が俺と違う。
もしかして俺が変なのか？そういえば弾も「お前がおかしい」とか言ってくるな。

「まあ……よろしくな。俺は織斑一夏。一夏でいいぞ」

「うん。よろしく一夏。僕のこともシャルルでいいよ」

「よろしく、シャルル」

と、そんなこんなをしている内に無事到着。

「時間やべェな。全然無事じゃねェよ。さっさと着替えようぜ」

どっかの誰かさんが早朝から喧嘩を売ってくるから遅れたに違いない。
遅れたときの言い訳にしよう。ラウラには悪いが。
とにかく遅れない事に越したことはないので、俺は上を一気に脱ぎ捨てた。一回で。

「わぁっ！？」

「？」

今の行為はそんなに珍妙だっただろうか。
早く着替えたい時はこれに限るぞ。みんなもやってみな。

「どうしたんだよ。っていうか着替えないのか？スーツ忘れたのか？男が女の前でパンツ一丁だと笑われるぞ」

「ぱ、パンっ……！」

「お前大丈夫か？顔赤いぞ？熱でもあるのか？」

どれどれ、俺が額を当てて直接診断してしんぜよう。

「だいっ、だいじょう、ぶ、だから……！」

いや、どう見ても大丈夫そうには見えないぞ。
さっきより顔が赤くなってるじゃないか。

「男同士だろ？なにをそんなに照れることがあるんだ」

「ホントに、ホントに大丈夫だから！だからねっ？もう着替えよう？」

「まあ良いけどさ……。着替えねェの？」

俺はシャルルの方を向いたまま着替え始めるんだが、シャルルは俺の体をジッと見つめて着替えようとしない。
……なんだこれ。

「う、うんっ？着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……ね？」

「お、おう……」

……やばいな。俺はそういう属性でもあったのか？否、断じて否だ！
シャルルをかわいいと思ったのは……そう、気のせいである。
男がかわいいなどあってはならないこと。うん、そうだそうだ。

「……」

しかしなんだ、この食い入る様な視線は。
これは自己紹介の女子の視線より存在感があるぞ。
こっちを向くなとは言っていたが男同士だ。
チラッと確認する程度なんにも問題ないだろう。
そう思ったんだが――

「（コルセット……？）」

見間違うわけがない、胸部に当てたコルセット。
後ろからでもそうだとわかる。
なんで男子のシャルルがそんなのつけてるんだ？
もしかして――――いやいや、胸部が悪いんだよ。腰のコルセットみたいなもんだ。胸痛という病気に違いない。
それはそれでかなりまずい気もするし、そもそも胸痛ってコルセットいらないだろ。

「（しかし……俺が世界初で４月。６月に２人目でシャルルなんだけど……こいつはなんで大きく報道されないんだ？史上２人目というのもビッグニュースだろうに）」

ああ、もうなんだかわけがわからん。
訊いてみるか？いや、訊いてどうする。
確信もないのに訊いたところでどうなるものでもない。

「シャルル」

「な、何かな！？」

まあ胸痛ってことにしとくか。
深読みするのは悪い癖だ。

「着替えるの早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、べつに……って一夏はまだ着てないの？」

コルセットのことが気になってそっちのことしか頭になかったからな。
腰のあたりで止まってる。

「いや、男って引っ掛かって着辛いだろ」

「ひ、引っ掛かって！？」

おおう、どうしたどうした。
もしかして引っ掛からないのか？
なんで急に顔赤くしてるかはわからんが、引っ掛からない様な方法を教えてほしいぜ。

「よしっ、行こうぜ」

「う、うん」

やっと着替えられた。
早くしないと鬼教官が怒るからな。

「そのスーツ着やすそうだな。どこのやつ？」

もしや引っ掛からない原因はスーツにあるのかと思い、訊いてみた。

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノアってシャルルのラストネームだよな？」

「うん、僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」

「へえ。社長――御曹司ってわけね。道理で」

なんでか知らないけど令嬢っていうのをこらえて言い変えた。
なんでそんなことを言おうとしたか俺にもわからんぜよ。

「うん？道理でって？」

「いや、雰囲気に気品があるし、いいところの育ちって感じがするよ」

「いいところ……ね」

そう言った瞬間にふとシャルルの顔に陰が差す。

触れられたくない話題ならこれ以上追及する理由もないな。

「それより一夏の方がすごいよ。あの織斑千冬さんの弟だなんて」

「そうか？なってみると案外辛いぞ」

なんていうか、俺が俺として見られる事が少ないんだよね。

『織斑一冬の弟』っていうキャッチコピーが名前の前に絶対付くから。

それでも俺は姉ちゃんの弟である事に誇りを持ってるし、姉ちゃんのことが大好きだけどな。

……おおっと、これはシスコンではないぞ？

「そうなの？」

「まあ姉ちゃんのことは大好きだけどな」

……やべ、口にしちまった。

「もしかして一夏って――」

「こやつめ、ハハハ！そんなわけがなかろう」

「へ？」

「――いや、なんでもない。まああれだ、お互い地雷を踏んで一機ずつ減ったってことで」

「？？？よくわからないけど……」

うわっ、やめろ！そんな白い目で俺を見るな！

「……ゴホン。シャルルくん。物理の問題です」

「なんでいきなり君付け……？」

「いいから。アインシュタインの相対性理論によるエネルギーの求め方は？」

「えっと、質量×光速の二乗―――」

「そういうことだ」

おれすげぇ！

たまに天才なんじゃないかと疑うときがあるぜ。

「……」

あれ？おかしいな？

シャルルならこのユーモアあふれる誘導の仕方を気付いてくれると思ったんだが。

「ぷっ……あははっ！なにそれ。ふ、ふふっ。一夏っておかしいなぁ」

俺はそんなに爆笑されるほどおかしなことを言ったか？

かなりインテリジェンスだったと思うんだけど。

「笑うなら「こやつめ、ハハハ」で返してほしかったんだが」

「もー、拗ねないでよ。一夏のギャグセンス、褒めたんだから」

それなら許そう。

まあこの程度俺に掛かれば朝飯前だけどな。

第１４話（前書き）

一夏萌え、一夏勘違い乙、一夏鬱な回

第１４話

「遅い！」

第二グラウンドに無事到着――とはいかなかった。
鬼が腕を組んで待ち構えていた。
鬼に金棒、小野に鉄棒。では孫悟空の棒はなーんだ？
如意棒？違うな。それは息子の孫悟飯でした！

「くだらんことを考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

パアンッ！

流石に下ネタは悪かった。反省してる。
とりあえず俺とシャルルは列の一番端っこにならんだ。

「ずいぶんゆっくりでしたわね。スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

なんでかって、そりゃあひっかかか――おお、下ネタは厳禁だぜ。
一話のうちに一回しか下ネタは言っちゃいけないって規制されてるんだった。
それに……なぁ？着替えのときのことを思いだしてみろ。
あのコルセット……ホントになんのためのものだよ。
さらしならまだわからなくもないが、コルセット……はぁ、思考停止しよう。
考えるのをやめたとき人は死ぬと言うが、それでもいいや。

「曹操が『天にまで届く宮殿を造るつもりじゃ』とか言ってきたんだから仕方ないだろ」

「ウソおっしゃい。どうして三国志の覇者がでてくるんですか」

そりゃあ「こやつめハハハ」繋がりだろう。

「それで、どうしてあんなことになったんです？」

ラウラのことか。それなら俺だって知りたいわ。

なんであんなガチバトルをやったか今でもわからん。

「なに？あんたまたなんかやったの？」

ああ、なんかややこしくなりそうな展開。

なんで後ろに鈴がいるんだ。狙ってるのか？

「こちらの一夏さん、今日来た転校生と喧嘩をしましたの」

「はあ！？一夏、あんたなんでそうバカなの！？」

はいはい、馬鹿だよ。

でもお前ら、今はお前らの方が馬鹿だと俺は思うぞ。

「――安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

ほら、言わんこっちゃない。

姉ちゃんの授業で騒ぐとか、いつになったら学習するんだよ。特にセシリア。

バシーンッ！

今日も有り難い出席簿アタックでした。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する！」

「はい！」

今日は二組と合同だからか、みんな元気いっぱいだな。

俺は色々なことが頭の中を巡り巡ってそれどころじゃないぞ。

特に箒に告白された事とか……あぁぁぁぁ……！！

ダメだ、落ちつけ。あれは恋愛フラグではない！死亡フラグだ！箒の！

だから冷静になれ、俺……。冷静に……無理だ！

一週間近く前からこのことが頭から離れないってどうなの、人として。

削除！削除キーはどこに！？

「……なにを顔を紅くして悶えているんですか？」

「そんなに女子と喧嘩したことが嬉しかったわけ？」

違う！否！断じて否！

別に俺は悶えたりなどしていない！

人生で初めて告白されたなんて……あぁぁぁぁ……。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだ。しな。――――凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

そりゃあさっき騒いでたからだろ、鈴と一緒に。

とりあえず頭を切り替えた俺は真剣な表情で前を向くんだが――

にへら

キモイ！自分がこんなにキモイとは思わなんだ！

こんなキモイ自分とはおさらば！バイバイありがとうさようなら！

もう忘れろ！シャット・ダウン！

「お前ら少しはやる気を出せ。――あいつにいいところを見せられるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！

……ん？俺が心頭滅却している内になんだか2人がやる気を出したようだ。

なにがあったんだろうか。まあやる気があるに越したことはないけど。

そういうことで俺も集中だ！

「それで相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませ

んが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィィィン

ん？上空からなにか甲高い金属音が――

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

どうやら箒の立てたフラグは俺が死亡するというフラグらしい。

ドカーン！ゴロゴロゴロゴロ……

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合ったな。っていうか何事――」

割と本気で危なかったぞ、今のは。

冗談じゃなく数メートル転がったからな。

むにゅ

なんだこれ？車に乗ってて手を出した時の感触に似てるね。

「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ！」

俺は恐る恐る自分の手のある位置に目をやった。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑くんは仮にも教師と生徒でですね！……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それは魅力的な――」

おおう、まさか山田先生とは思わなかったぜ。
しかしあれだ。普段はだぼだぼの服を着てるからわからなかったが、ＩＳスーツを着て曲線がはっきりとしているとわかるな。
山田先生の胸、姉ちゃんより大きいな、と。
しかも俺はさっきの衝撃で押し倒す様な体勢で、胸を鷲掴みにしている。
つまりこれが本当の死亡フラグだと――。
早くどかなければいけないのは重々承知だが、手は自然とグーパー運動を繰り返す。
たぶん重機を扱う工事現場なんだ、ここは。グーパー運動は安全確認のための仕方のないことなんだ！

「――ハッ！？」

背後から喰い殺さんというばかりの視線を浴びて俺は現世に復帰して横に転がる。
刹那、さっきまで俺の頭があった場所を閃光が貫いた。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

目が恐いんですが、目が。
ほら笑おうぜ。目も笑ってくれよセシリアあああ！

「……」

ガシンと何かが組み合わさる音が聞こえた。
そうだ、敵は1人じゃない。もう1人いたんだ……！
そいつは連結した双天牙月を振りかぶって――

「死ぬ！」

躊躇なく投げてきやがった。
しかし甘いな。俺は体が柔らかいのでリンボーでかわせるのだよ。
鈴の投げた棒をリンボーでかわす……なんちゃって。

――ってアホなこと考えてる場合じゃねェ！
投げた双天牙月はブーメランの要領で帰ってくるのを忘れてた。
これは……避けられない……。
死ぬ体勢が頭ブリッジってどうなの。八宝菜じゃないんだから。

「はっ！」

ドンッドンッ！

しかし双天牙月の両端を的確に銃弾が捉え、それは軌道を変えた。
俺は窮地を救われた射手を見てみると、それはなんとあの山田先生だった。
普段の子犬の様な雰囲気とは裏腹にこんなことが出来るとは……やるな。
とてもじゃないが入試で勝手に気絶した人とは思えない。

「……」

どうやら俺だけでなく、セシリアと鈴はもちろん、他の女子も驚いていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」

「え？あの、二対一で……？」

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

そういうことというとこの２人は変に張り切るから……言ったのか。
相変わらず人心掌握はお手の物だな、姉ちゃんは。
そんなこんなで３人の模擬戦が開始して、なにやらシャルルが山田先生の期待の説明を始めた。
俺はというとそんなことは頭に入らず、『コルセット』という単語が頭の中をぐるぐると回転し始める。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を払って接するように」

あれ？終わったの？
ずいぶん早く負けたもんだな、あの２人も。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ではわかれろ」

げっ……マジか。
そんなことを思っていると俺とシャルルの周りにわらわらと人が集まって来た。

「織斑くん、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて～」

「デュノアくんの操縦技術見たいなぁ」

「ね、ね、私も良いよね？同じグループに入れて！」

いや、そんなにわいわいやられてもな……。
明らかに8人越えてるだろ。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一名ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンドを百周させるからな！」

流石鶴。
その一声でわらわらと集まっていた女子は蜘蛛の子を散らす様に各グループに別れた。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あっ、早い者勝ちですよー」

ああ、あの胸をさっきまで触っていたんだよなぁ、懐かしい。
手をグーパーしながら、その感触を思い出してみる。

流石思春期男子。あの感覚は忘れもしないぜ！

ギュムッ！

「いってぇ！な、なんだ……？」

誰だ、故意に足を踏んだヤツは。出て来い。

「何をジロジロと見ている。さっさと実習を始めるぞ」

「箒……」

あっ、やばい。

完全に忘れてたあのことを思いだし、俺はボウッと顔に熱がたまる。

一週間近く口を聞いてないので尚更恥ずかしい。

どうせこれも俺の深読みのしすぎなのだ。

箒は『買い物に付き合ってくれ』と言ったに違いない。うん、そうだよ。

でも……あぁぁぁぁぁ……。

勘違いさせる様なこと言うなよな……。

そんなことを考えながらポンポンと最初の2人を終わらせて箒の番に。

2番目の人がこれまたISを直立させたまま降りたので、箒を運ばなければならないんだが――――。

「どうした？早く運んでくれ。私はあまり望まないが、安全面を考慮すると仕方がない。私はあまり望まないが、仕方がないな」

やっぱり望まないんだな。

はぁ……やっぱ俺の勘違いか。

そうか。そうだよな。箒が俺のこと好きなんて有り得ないよな。
『なに1人で舞い上がってんの？バッカじゃない？』
黙れ鈴。
『あら、勘違いとは意地らしいですわね』
黙れセシリア。
『ふんっ。お前のことを好きになるヤツなどこの世に存在するわけがないだろう』
はいはい、そうですね、箒さん。
なんか勘違いしてたとわかるとみんなが俺のことを笑っている様で……あぁぁぁぁ……。
今度は違う意味で恥ずかしくなってきた。
『安心しろ。私はお前を愛している』
よし、脳内美化8割増しの超絶美人の姉ちゃんが励ましてくれたから俺はもう立ち直ったぞ！

「じゃあ踏み台で――」

「安全面を考慮すると仕方がない、と言ったが？」

そんなに仕方がないとか連呼するな。哀しくなるから。

「（あ、あれが伝説の『お姫様だっこ』というやつか……！なんというか、……いい……ではなく！男女があのように密着するなどあってはならないことだろう！……しかし、まぁ、安全面を考慮すれば仕方のないこと。そう、仕方のないことなのだ）」

なにを顔を紅くして頷いてるんだろう。
そんなに怒ってるのか？俺の勘違いを。
そりゃあ悪かったっと思うよ？思うけどさ？男じゃん？俺も。
それは仕方のないこと。そう、仕方のないことなのだ。

「……じゃあ運ぶぞ」

まあ嫌がられているだろうが、俺はお姫様だっこで箒を担ぎあげる。

「きゃっ――――ゴホンゴホン！」

「どうしたんだ？」

「い、いや、なんでもない！」

なんでもないならいいけどさ、気を紛らわすためにわざとらしい咳をするのはやめてくれ。

しかも『きゃっ』って悲鳴だよな……はぁ……。

もういっそ踏み台になりたいぜ、俺は。

「もうちょっとちゃんと掴まらないと落ちるぞ？」

「う、うむ……。そ、そうだな。落ちるといけないし、一夏に掴まるのは仕方ないな」

そういって首の後ろにギュッと手を回してくれる辺り、嫌いではないと思うんだけどどうなんだろうか。

気を遣わせてるとか？――――いやいや、箒に限って……って言えば失礼だな。

「箒」

「な、なんだ！？」

「いや、ＩＳに移らないと実習が進まないだろ。もっと近付くか？」
「い、いや！これ以上近付かれると私も平常心を――」
……なんの話だ？
あれか？俺が近付くと平常心を保ってられないほどイヤなのか？俺とのコミュニケーションが。
「……はぁ。何の話ですか？」
「な、なんでもない！と、とにかく、大丈夫だ！」
そう言って俺から飛び退くように打鉄に乗り込んだ。
どんだけ必死なんだ、こいつは。
「大丈夫そうだな。じゃあ起動と歩行までやって交代――」
「一夏」
「なに？」
テンション上がらねェなぁ、もう。これが五月病か。もう六月だけど。
「そ。その、だな。今日の昼は予定があったりするのか？」
上ずった声で、箒がそう言ってきた。
『なにを勘違いしているんだ、お前は』
『え？』
『昼に呼び出しと言えば――決まっているだろう？』

そう言うとぞろぞろと出てくる女子たち。
『もう我慢できませんわ。一夏さんの誤想ぶりには嫌気がさしていたところです』
『これを気に幼馴染引退するわ』
『僕は一夏がそんな人だとは思わなかったよ……』
『『『『覚悟は出来ているな？』』』』
以上、俺の脳内劇場終わり。
流石にこれはマイナス思考過ぎるだろ。
もっとポジティブに行こうぜ、ポジティブに！
こんな悪いヤツらじゃないよ、こいつらは！
っていうかなんでシャルルまで……？

「おい、訊いているのか？」

「ああ、悪い。大丈夫だけど……うん」

「そ、そうか！」

なんか心なしか箒が嬉しそうなんだが。
それがまた恐い。しかし断ることも出来ないしな。

「で、では、たまには昼食を一緒に取るとしよう。うむ、それがいい」

「ホントに！？ホント……だよな？」

これは素直に受け取っていいんだよな？な？

「あ、当り前だ。
（そ、そんなに喜んでくれるのか……ふふっ。これは早起きした甲

斐があったというものだっ）」

よかった。

これで箒との関係の修復も出来そうだ。ふふっ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5645v/

姿の違う織斑一夏

2011年8月9日22時30分発行